



君に預けて

山城 窓

どうして俺は走っているんだっけ？

どうして俺は走っているんだっけ？ 息も絶え絶えで、足はヨロヨロで…誰に命じられたわけでもないのに…どうして俺はこんなにかんざっているんだっけ？

そう、最初はただ足跡を残したかった。あまりにも何事もなく過ぎ去っていく日常に嫌気が差して。なんせ俺はいわゆるワーキングプアというやつで、貯金を積み重ねる余裕のないぎりぎりの生活を送っていた。それは…かつて趣味だった旅行やカラオケから遠ざかり、好きな本や洒落た服も手に取ってみては諦めるといふ、楽しみを放棄するような暮らしで…彩りやメロディーのない日々とでもいおうか…どこか囚人のような毎日だった。誰かに閉じ込められたわけでもないのに。

そして去年の暮れに気付いた。俺は毎年誕生日に、その一年間の自分自身の重大ニュースをノートに書き記しているのだが、去年はとうとう何一つとしてノートに書き留めることができなかった。本当に…これというものが何もなかったのだ。

何かをしようと思った。なるべくカネの掛からないことで、それでいて達成感、充実感を味わえるようなことを。そして…このフルマラソンの大会にエントリーしたんだ。

俺も若いころにはそこそこスポーツもやってたし、時間さえ掛ければ完走する自信はある。開催地も電車で通える範囲だし、これといって障害はない。よし、これだ！と思ったが…一つだけ気がかりがあった。

フルマラソンを走っている間、財布なんかの貴重品を…どこに置いておけばよいのだろうか？ どこかに預けるところがあるのか？ 聞いたことないな。たぶんみんな誰かに預けているんだろう。家族や友人や恋人なんかに。じゃ俺も誰かに預けておけばよいか？ でも誰に？

…そう、俺にはそれを預ける相手がないのだ。俺のタイムは恐らく五時間を越える。そんな長い時間誰が待っていてくれる？

故郷になら旧い友達もいるが、こんなことのために呼び寄せられるような奴はいない。そして近辺には友達もゼロだ。二十代の十年ですっかり人間嫌いとなった俺には友達を作るという発想自体がなくなっていた。

だいたい人間なんてどいつもこいつも自分の都合しか考えてやしない。自分にとって都合の悪いものは悪とみなして、間違っていることにして。そのくせみんな自分が正しいと思っている。「価値観の違いを尊重する」って言葉だけ知ってて、その実全然そんなこと出来なくて、自分と違う者を蔑んだり罵ったり……

ああ、そういえば…一人だけいる。俺と同じように上京している同郷の友人が。ゲームプログラマーをやって製作に携わったソフトがヒットして、なかなかデカイ収入があって最近マンションを購入したとかいうやつが。そいつは同じ会社に誘ってもくれる親切なやつだが…そんなあからさまな成功者に、汗だくで、もがくように走る姿を見せたくない。思えば同じ理由でその仕事の誘いもずっと断っているぐらいだ。

そんなこんなで手ごろな友達のいない俺は彼女を作ることにしたんだ。もともと彼女は欲しくないわけじゃなかった。ただ「カネが掛かる」という理由でそれまで作ろうとはしなかった。

そんなときに俺は街でルリ子と出逢った。ルリ子は歩道橋で友達と並んで四車線の車道を見下

ろしながら何か話していた。友達のほうは茶髪でイヤリングをして化粧も厚く、どこかけばけばしかったが、それに比してルリ子は黒髪で化粧つけがなく素朴な印象だった。そしてどうい話の流れだかはまったくわからないのだが、ルリ子はそのときこう言った。「お金は大事にしないとね」

それを聞いて俺はルリ子に決めた。すぐに「かわいいね」と声を掛け、「一緒にゴハン食べよう、奢るから」と誘うとルリ子たちは割とあっさりと乗ってきた。二度目会うときはルリ子と二人だけで映画を見た。その別れ際に「付き合ってくれ」というと彼女は承諾してくれた。貴重品を預けることだけを目的とした告白だったが、ルリ子はその時、目を輝かせて喜んでくれた。「どうして私が良いの？」とルリ子が尋ねたときに、「健気そうで、派手さがなくて良い」と答えると、彼女はうんうんと嬉しそうに頷いていた。

もちろん貴重品を預けることが目的だなんて伝えていないが…やがて俺はその最初の目的を忘れていった。彼女の純真さに和まされて、俺はすっかり彼女に参っていた。

彼女は俺が電話を掛けるといつも嬉しそうに応じてくれたし、実際会ったときは、それ以上に嬉しそうに足取りを弾ませて俺に寄り添ってくれた。俺の地味な顔も「優しそう」といつてくれたし、くぐもった低い声も「渋くて素敵」と褒めたくれた。俺のちょっとシニカルなところさえ「いろいろ考えてるんだね」と感心してくれた。

そして大会前にルリ子に貴重品を預かってくれるように頼んだときも、彼女は嫌な顔一つ見せず、「わかった。預かってくね！」とはしゃいで応じてくれた。

そんなルリ子に早く会いたいから…きっと彼女は喜んで俺を迎えてくれるから…だから俺は今走っているんだ。膝は一步ごとに激しく痛んで、フォームは無様に乱れて行って…誰も待ってなかったら俺はとっくに投げ出しているだろう。…でもあの笑顔を見たい。あの優しい声を聞きたい。だから…走る。それに…こんなふうに誰かを想ってがんばるってのは、なんて素晴らしいことだろう？ 「カネが掛かるから」なんて理由で彼女を作らなかった自分が馬鹿に思える。この幸せに比べればどんな大金でもきっと「はしたカネ」だ。はしたカネを後生大事に守ってどうする？

足を引きずって、汗も出なくなつて、ボロボロになりながら、俺はやがてゴールにたどり着く。ルリ子を探す。なかなか見つからない。仕方ない。競技者もその知人も運営のためのボランティアの人もごったになって、この中からたった一人を見つけ出すなんて、そう簡単なことではない。

でも大丈夫。こんなときのために待ち合わせ場所を決めておいた。参加者の準備や休憩のために近くの小学校の体育館が開放されているのだが、その小学校の校庭の片隅のイチョウの木の下がその場所だ。

俺はそこに辿り着く。ルリ子はいない。まあ、そりゃずっとここに続けられるものでもない。俺は焦らず、ルリ子が現れるのを待つ。しかしよく見ると…木の裏に、俺のベンチコートが畳まれてある。これもルリ子に預けておいたものだ。荷物を置いていったのか？ まあベンチコートぐらい置いておいてもよいのだが…その脇にコンビニ袋…。中を見る。ルリ子に預けておいた貴重品、俺の携帯電話と財布がそこにある。これじゃ…わざわざルリ子に預けた意味がないじゃ

ないか？と呆れてしまうが、もともとのんびりした子だ。あまり深く考えてはいないのだろうな、と気持ちが和んでしまう。

俺は携帯電話のロックを解除して、ルリ子に電話を掛ける。出ない。俺は自分の財布を確認する。あれ？ お札がない。確か二万四千円ほどあったはずだが、それがなくなっている。札入れには代わりに一枚の紙切れ…。そこに書かれている言葉を読む。

“ありがとう。ルリ子”

……何が起きているのか、しばらく俺にはわからない。これは果たしてどういうことか？ しかしまもなく状況を理解する。なあに簡単なことだ、と気付いて俺は思わず呟く。

「ルリ子にカネをパクられた…」

ルリ子は見つからない。次の休日に俺はルリ子を探して駅前を練り歩いていた。相変わらず電話には出ないし、留守電に怒りのメッセージを入れたが、それが災いしたのかその返しもないし。そして…俺は彼女の住所を知らないし。隣町のコンビニで働いているとは聞いているが…コンビニって結構ある。しかも俺は彼女が働く曜日や時間帯を詳しく知らない。待てよ…基本的には九時から一七時だとかいっていた気がする。でも夜も入るようになったとか言ってたっけ？ でも曜日も変わったとかどうとか……そんなふうには不十分な情報しか持たない俺には確実に彼女の勤め先を探し当てることなどできない。だいたい彼女が俺を避けているなら、俺が店に入る前に店の奥に引っ込む可能性だってある。それをされたらお手上げだ。

そして俺は偶然を必然に帰るべくただただ練り歩いていた。家からの最寄り駅は同じといていたし、元々出会ったのがその駅の駅前だ。生活圏はある程度重なっているはずだ。歩き続けていればいずれ出会える。そう思いこみながら俺は彼女の現れそうな場所をうろつく。

俺を歩かせているのは怒りか？ 怒りだったはずだ。しかしこの一週間、筋肉痛や関節痛が引いていくのにつれて、俺の気持ちも落ち着いていった。そして「何かの間違いなんじゃないか？」「何か事情があるんじゃないか？」と疑念やら心配やらが湧いてきた。

彼女を見つけないと何もわからない…そう思って俺はとにかくルリ子を探すことにしたんだ。

だいたいそんな悪い子じゃないはずだ。そんなふうには見えなかった。なんせ結婚願望なんかまったくない俺もこの子となら一緒になってもいいかもしれない、と思えたほど…良いイメージしかない。

そんなことを思いながらうろうろと歩くが、しかしそう簡単には見つからない。もしかしたら永久に会えないかもしれない。日も暮れた。春分の日も過ぎたが、まだ夜は冷える。ちよつとだけ本屋に寄って、それから帰ろうと思った瞬間に、その本屋からルリ子が出てきた。あまりに不意を突かれて、俺は声を出すことも表情をつくることもできなかつた。ルリ子は一瞬俺のほうに目をやり、すぐに前を見据え、それから俺に気付いたようにもう一度俺の顔を見る。しばし見つめ合い、時間が止まる。

ルリ子は逃げようとはしない。しかし何も言わない。表情も読み取れない。困っているようにも見えるし、怯えているようにも見えるが…ただの無表情にも見える。

「ルリ子」と声を掛ける。

「ん？」とルリ子は俺を見上げる。

「なあ…」という俺も言葉が続かない。ルリ子はぼんやりとした目で黙ったまま。

「とりあえず、店に入ろう。ラーメンでいいだろう？」俺は視界に入ったラーメン屋を指し示した。ルリ子はこくりと頷いた。

向かい合った席で、ルリ子は目の前に置かれたラーメンの丼に手を添える。手が冷えていたようで、彼女は丼の温もりを心地よさそうに受け取っている。俺は割り箸を割り、ラーメンを啜る。なかなかコシがあつて、スープも濃厚だ。安さゆえに味に期待はしてなかつたが、これはなかなかいい店を見つけた…って今はそんなことどうでもいいんだ。ルリ子はなぜ喋らないんだ？

ルリ子から事情を説明するのが筋じゃないのか？ 俺から訊かないといけないんか？

「どういうことなんだ？」と俺は思わず問い掛ける。

ルリ子は答えない。依然として何を考えているのかもまったく読めない。何もいわずに彼女はラーメンを口にする。仕方なく俺が質問を続ける。

「あの日…あのマラソンの日。君は先に帰ったね？」

ルリ子は頷く。

「預けておいた荷物を全部木の下に置いて」

ルリ子は頷く。

「しかも見たら財布の中のカネがなくなってた」

ルリ子は頷く。

「どういうことなんだ？」

ルリ子は答えない。不思議そうな顔で俺を見る。まるで俺のほうがおかしな態度を取ってでもいるように。怒るつもりはないんだが、苛立ってきたせいとか責めるように俺は話す。

「あれから俺がどうしたかわかるか？ なあ？ どんだけ苦労して帰ったか？ わかるだろう？

お金がなければどれだけ困るか？ 他人のカネを無断で取るなんてあまりにも…」

「小銭は残したわ」と彼女がじっと俺の目を見つめていう。小銭は残した…ということはお金を盗ったのはやっぱり彼女だったのだ。もしかしたら、盗ったのは他の誰かで、それを預かっていた彼女は申し訳なくなって消えてしまったんじゃないかとも考えていたが…その可能性は消えた。

「たしかに小銭はあった」と俺は話す。「四〇〇円はあった。でもスポーツドリンクを買い帰りの電車賃が足りなくなった。いけるところまではいったが、足りないから後は歩いた。わかるか？ マラソンを完走して疲れきっているのに、俺はそれから三駅歩いたんだ。それがどんなに大変な…」

「完走したの？」と突如目を見開いて彼女が俺に訊いた。

「うん…」驚いた俺はそう言ってただ頷いた。

「やったじゃないの！ よかった！」と弾んだ声で言ってから、それから気を取り直したのかすぐに表情を消した。そして俺はまた混乱する。彼女は今、笑って誤魔化そうとしたとか、うやむやにしようとしたわけじゃなさそうだ。だってそうならすぐに表情を戻すか？ 思わず気持ちが零れてしまったようだった。この子は本当に俺のことを心配してたんだ。ちゃんと走りきれるかどうかを。思わず気持ちが上ずるが…しかしそんな子がどうして俺のカネを盗る？ やはり何か事情があるのだろう。単にカネをちよろまかしたとか、そんなことではないはずだ。

「とにかく」と俺は改めて問いたです。「何か事情があるんなら、それを話してくれないか？」

彼女は答えない。首を縦にも横にも振らない。俺はどうしたらいいかわからなくなって、要求を変える。

「話せないんなら、とりあえずカネを返してくれないか？」

「はあ？」

突如彼女の目に軽蔑の色が宿る。そして唇をゆがめて、うなるようにつぶやく。「考えらん

ない。最低。どうかしてんじゃないの？」とか聞こえた気がして俺は耳を疑う。だってなんで俺がそんなふうに思われなきゃならない？　なんで急に怒り出した？　むしろ怒るべきは俺だろう？　抑えていた俺の感情が彼女から噴き出したってのか？　そんなわけのわからないことが脳裏を過ぎるほど、俺の思考はグラグラになる。

「最低なのは君だろう？」とどうにか俺は言葉を発す。

「よくそんなことがいえるわね？　あなたはそんな立派な人間なの？　散々人を待たせといて…」

「だって…待っててくれるって君も承知してくれ…」

「勝手なこといわないで！」

「何が勝手なんだ？」

「本当にうだつが上がらなくせに、物言いは偉そうなんだから」

「何を…」

「性格もひねくれてるし、なんかごちゃごちゃ言って、面倒くさいし」

「だから…」

「自分勝手に服装もダサいわ。一緒に歩くのも嫌になるぐらい」

「あの…」

「本当にうだつが上がらなくせに」

「それはさっきも…」

「そんなすべてを私は受け入れてきたのに……」とルリ子は強い目でいって、一度つばを飲む。

俺のしゃべる間がようやく訪れたのに、俺はすぐに喋れない。彼女は…俺にも受け入れろとでもいっているのだろうか？　いや、だから、

「とにかく事情を話してくれっていったじゃないか？」とやっとのことで俺は口に出す。

「カツゼツも悪くて何いってんだかよくわからないし」

「そんなことはないだろう？」

「なんて？」

「あの、だから、そりゃカツゼツは悪いかもしれないけど、それでそんなに困ったりもしなかったらどう？」

「どうにかこうにか推理しながら話してきたのよ。たぶんこんなこと言ってるんだらうな、とか考えて」

「いや、でも今ちゃんと話は聞こえたんだろ？　だからちゃんと答えたんだろ？」

「なんて？」

「だから…」カツゼツを責められて俺はしゃべるのが少し怖くなる。でも何かを言い返さないと俺の心は押しつぶされそう。怒りも充満して…わけがわからなくなった俺の本能は逃避を選択する。

「もういい！！」と俺の声が店内に響く。「君は最低だ。こんなやつだと思わなかった。帰る！」

席を立った俺にルリ子が畳み掛ける。

「自分から誘っておいて、お金も払わずにいくんじゃないでしょうね？」

…どう考えてもこんなふうにいわれる筋合いはない。だが怒りに震えて俺は財布から千円札を一枚出し、テーブルに叩きつける。「二度と会いたくない」と言い放つ。

振り返らずに店を出る。徒歩六分の家までぶつぶついいながら俺は帰る。部屋に入ってから改めて嘆く。何が起こったんだ？ 何の罪もない俺がどうして散々悪し様にいわれて帰ってきた？

お金も取り戻さずに。事情もわからないままに。ラーメンも残して。本当に…俺はまったく対応できなかった。彼女の豹変に。あまりに驚いて。

「もしもし」とルリ子は話し掛ける。

「なんだよ？」俺は応じる。

一週間後にルリ子は連絡を取ってきたのだ。そして切なそうな声でまた会いたいとぬかしやがる。よくもまあそんなことがいえたもんだ。自分が何をしてるのか、何をいったのかわかっているのかと、問い詰めたくもなるが、電話ではとくにカツゼツの悪さが気になって、あまり細かい話をする気にならない。仕方なく…会ってやることにする。

「ちゃんと事情を話してくれるんだろうね？」

「とにかく会ってから」

居酒屋で待ち合わせることにして電話を終える。店はちゃんと予約しておくそう。気が利く子なんだ、あの子は……俺はまだルリ子に対して良いイメージを抱いている。けなされまくったあの日がやはり何かの間違いなんだと思ってしまう。俺がそう思い込みたいのだろうか？ あの日のルリ子の言葉を真実と思いたくないからだろうか？ 会えばあの日の言葉を訂正してくれるかもしれないから、俺はあの子に会いたいと思ってしまったのだろうか？ まあいい。どっちにしたってあのままじゃ終われない。

約束の時間に店に入るとルリ子は既にそこにおいて、肉汁のしたたるサイコロステーキに箸を伸ばしている。目が合っ、彼女も俺に気付いたようだが、彼女は何もいわない。ただ軽く会釈するだけ。

俺は彼女の向かいに座り、店員に梅酒を頼む。

「それと“貝柱入りハルマキ”と、“トマトとバジルのふんわり玉子”」と、ルリ子は注文を追加する。

そしてしばらく彼女は話さない。彼女から切り出すべきだろうと思って、しばらく俺は待つ。おしぼりを手の中で遊ばせながら。しかし、彼女からは話しそうにないなと気付いて、仕方なく問い掛ける。

「用があるんだろ？」

「あるわ」

……沈黙。

「だからその用を話してくれないか？」

「話すわ」

……沈黙。

「だから…」

ここで注文された料理が来る。テーブルに並べられる料理を見やりながら、俺は気持ちを仕切り直そうと努める。店員が去った後、当然の事のようにルリ子は料理を俺の小皿に取り分けてくれる。こういうところは本当に気が利いてて良いんだよなあ、と一瞬気が緩んでしまうが、そんなことではいかん。今日はきっちり話をしないと。

「この間は」と不意にルリ子が口を開く。「いろいろ言っちゃってごめんなさい」

あまりに殊勝な態度に俺は口をぽかんと開けてしまう。ルリ子が続ける。

「そりゃいろいろ人間だからあるんだけど…なんだかんだいっても私はあなたのことが好きなの」

俺は何もいえない。ルリ子はまっすぐな目で続ける。

「カツゼツが悪いのは、別に人として悪いことではないし。それに言葉が聞き取れないときでも、私はあなたの想いがわかるのよ。あなたの目がそれを伝えてくれるの。あなたの目ってなんか特別な。見つめられるとそれだけで気持ちよくなるような…体の内側にうったえられるような…上手くいえないけど、なんか良いのよ」

…これだ、彼女のこういうところに俺は落ちてしまったんだ。俺の悴んだ手を握って暖めてくれるような、まつわりつく蜘蛛の巣を払いのけてくれるような…そんな彼女の言葉に。ただのお世辞だとか小手先のフォローだとか、そういうふうには見えなくて…

「ありがとう…」と俺は思わず礼を言ってしまう。

「だからね」ルリ子は優しい笑顔で話す。「前みたいに、みっともないことは言って欲しくないのよ」

「え？」

「もっと潔くして欲しいの」

…何をいっているんだ？ ちょっと待て、ちょっと待て。なんか俺に落ち度があるみたいじゃないか？ そりゃ人間としては俺に落ち度は山ほどあるだろうさ。でも今回の件について俺は何も間違ったことを言っていないだろう？

ルリ子は続ける。

「そんなね、大人物になってとはいわないけどさ、なんか人間が小さいなってこっちが思っちゃうようなことは控えて欲しいの」

「人間が小さいとかじゃないだろ！？」とようやく俺は言葉を返す。今度はルリ子がきよとんとする。「いや、だからどうして俺がそんな顔をされなきゃならないんだ？ 俺は前事情を話してくれっていただけだぜ？ そしてカネを返してくれって。それは自分のカネなんだぜ？ 自分のカネを返せということの何がおかしいんだよ！？」

「大の男が大きい声でがたがたと騒いじゃってみっともない」と臆することなく彼女が応じる。今日はちゃんと押し負けないように話そうと心がけてはいたのだが…どうも彼女は俺にロックを掛ける言葉を知っているようだ。彼女が続ける。

「少し褒めると調子に乗る。何いっているのかもよくわからない。こんな男どうしようもないわ」

「なんでそんなことを…」

「ニューファンランド？」

「そんなこと言ってない！」

「そう聞こえたのよ」

「目を見れば想いは伝わってくるとかいったただろ？ ついさつき」

「あなたがみっともなく目なんか見てられなかったのよ」

無茶苦茶だ。しかし俺はまた何もいえなくなる。もうわけがわからない。ねじれてねじれて俺の思考はここでぶつんと切れる。でもどうにか喋ろうとして俺は話を変える。

「…君はいったい今日どうして俺を呼んだんだ？」

「この間あなた千円しか置いていかなかったでしょ？」

「それが？」

「足りなかったのよ」

「へ？」

「あなたのみそラーメンが六五〇円。私のしょうゆラーメンセットが九〇〇円。合計一五五〇円。ほら足りないでしょ？」

「よくそんなことがいえるな？」と俺は返すが、あまりに呆れて声がひっくりかえる。

「そりゃそのぐらいの計算できるわ」

「そうじゃなくて、ちゃんと俺の分には足りているよな？」

「だから私の分が足りてないじゃない」

「君はそもそもカネを返さないといけない立場なんだぞ？」

「またそんなことを…」彼女はそうぼやく。汚いものでも見るような眼で。挑発的な口調で彼女は続ける「いろんなことが下手なくせに」

「もういい！」とって俺は立ち上がる。

「何よ、お金も払わず帰るなんて卑怯よ。自分から誘っておいて」

「今日誘ってきたのは君だろ？」

「前あなたが誘った。今日はただのその続き。あなたの失態の処理のための。あなたが払うのが筋よ」

筋なんか通ってない。だがわけもわからん、もう知らん。ようし、いいだろう、手切れ金として払ってやろうじゃねえか！

そして俺は一万円札を叩きつけて店を出る。ずかずかと歩いて店を出る。わけもなく肩で風切って進む。なんてカネに汚い女なんだ？ 汚いというか…なんだろう…お金が絡むと、とたんにあの子はどこかおかしい国へ行ってしまふ。どういうことだ？ あの執着は何なんだ？ そんなに貧しいだとかはきいていないが…家も実家住まいで父親はたしか大学教授だとかいってたから…中流かそれ以上だろうに。ちゃんと謝って事情を話してくれればこっちもわかってやって、また上手くやっていくことだってできたかもしれないのに…。ってかもう知るか。関係がない。二度と会うものか。これっきりだ、これっきり。

事情

俺の仕事はただのデータ入力。単純で楽な仕事の筈なのだが、俺は残業をしたことがない。疲れるからだ。俺はフルマラソンは走りきれぬ。体力はある筈だが…肉体の疲労と精神のそれとは違うのだろう。肉体の疲労は心地よいものでもあるが、精神の疲労は心地悪い……ちょうどこの満員電車のように、人間として不自然な状態で長時間いると、ただただストレスがたまっていく。

仕事終わりの帰りの電車でそんなことを考えていると、車両の隅にルリ子の友達を見つけた。初めてルリ子と出会ったときに一緒にいた女の子だ。ミユキだったかな？ その日ミユキも一緒にゴハンを食べたのだが、その後はまったく会っていなかった。

向こうも俺に気付いたのかずっとこっちを見ている。話しかけられるような距離でも状況でもないので、とりあえずその後は目を逸らして放っておく。

同じ駅で降りて、同じタイミングで改札を抜けたので、俺は声を掛けてみる。聞きたいことがある。もちろんそれはルリ子のことだが……とすると俺はまだルリ子に未練を残しているのか？

「君たしかルリ子の友達だよな？」と俺は声を掛ける。

「ええ、そうですよ」愛想よく彼女は応じる。

「俺のことわかる？」

「わかりますよ。ルリちゃんと付き合ってるんですよ？」

「まあ…」付き合っている？ 付き合っていた、じゃないのか？ 何も聞いていないのか？ 「ルリ子とは最近会ってないの？」と俺は尋ねる。

「時々会ってますよ。この間も急に呼ばれて、居酒屋で、なんか連れが怒って急に帰ったから残り一緒に食べようとかって話で」

「ああ、そうなんだ…」…怒って帰った連れってのは俺のことだな。

「で、今日もこれから会うんですよ」

何故かギクツとしてしまうが、別に俺には関係ないことだ。

「ところで」と俺は確認する。「ちょっと聞きたいんだけどさ、あの子は何かお金に困ってんのかな？」

「いいえ」と不思議そうにミユキは答える。「困ったりはしてないと思うけど…あの子実家だし。だって今日もバルティカで会うんですよ？」

「バルティカ？」俺は思わず首を傾げる。「バルティカって結構高級な店だよな？」

「ええ、しかも奢ってくれるそうなんです！」にっこりと彼女は続ける。「なんかちょっとしたお小遣いはすぐに調達できるとかで。しかもなんか今日も最初は別の人と会うみたいなんですけど、その人は今日もお金だけ払ってすぐに怒って帰るから、その人の食べ残しも食べちゃえばいいとか。よくわからないんですけど」

……………まさか、と思ったときに案の定、ルリ子から電話が来る。

「もしもし、あの…この間はごめんなさい。会いたいの。お願い。これから。駅ビルの最上階のバルティカってお店で待っているから…」

「わかった」と言い放って俺は電話を切る。なるほど、今度は最初から意図的に俺からカネを巻き上げようって腹だな…………あの野郎！

俺はミユキを置き去りにして、バルティカへ駆けつける。もう会うつもりはなかったが、その決意を怒りが悠々と越えていく。

店に入ると奥のテーブルでルリ子は、どこか新しそうで高級そうなワンピースと、その上にボレロを纏い、グラスのワインに口を付けている。俺はそこに歩み寄る。

「早かったのね？」とルリ子が意外そうな顔を見せる。

「どういうつもりだ？」と俺は凄む。

そこに上品そうなウェイターが料理を持って現れる。「“フカヒレの姿煮”と“タラバ蟹の辛し炒め”です」

「どうも」とにっこりと笑ってルリ子が応じる。

突っ立っている俺をウェイターが怪訝な目で見ると、その視線が心地悪くて俺は仕方なく席に着く。

「さっきミユキちゃんに会った」俺は唐突に伝える。「小遣いはすぐに手に入る…バルティカで人と会うけど、その人はすぐに怒って帰るから、その残りを食べれる…そういうことになってるらしいな？」

「ええ」とルリ子は苦笑いで答える。苦笑い…というより照れてるように見える。褒められたときみたいに…なんだこの女？

「君はいったい何を考えているんだ？ なあ、俺をなんだと思っているんだ？」

「いったいあなたは」とルリ子が問い返す。「何を怒っているの？」

またわけのわからないこといいやがって…怒るに決まっているだろう？

「俺はカネを盗られたり、巻き上げられたりしてんだぞ？」

「それがどうしたのよ？」

「そんなの泥棒じゃないか！」

「だからそれがどうしたのよ？」

「もういい」頭が痛くなってきた俺は投げやりに告げる。「いいから俺のカネを返せ」

「また…」呆れきったような顔でルリ子は言う。「なんでお金を返せとかみっともないことをいうのよ？」

「何が？」

「よく聞いて」諭すように彼女は続ける。「マラソン大会のとき、私はあなたのお金を盗ったわ。それから会うたびあなたからお金を巻き上げた。その何がいけないの？」

「…その何がいけないんだ？」どう考えたって俺が正しいよな？ 彼女が間違っているよな。なのに…彼女は堂々としていて、それに気圧されて何故か俺のほうがよくてくる。

「本当にもう…そんな人と思わなかった」彼女は毅然としたまま話す。「前々から私はあなたの財布から時々お金を抜いてたわ。買い物を頼まれたときにお釣りを誤魔化したこともあった。でもあなたは怒らなかった。そういうところが好きだったのに…」

そうか、こんな若い子がどうして俺なんかと付き合ってくれたんだろうと思うこともあったが

、俺のそういうところを好いてくれていたのか…っておい、ちょっと待て。前から盗ってたのか？ 気付かなかった。そういや財布のお金が減るのが早くなったように思うことはあったが…デート代がかさんだだけじゃなかったのか。

「いい加減にしてくれ…」と俺は声を絞り出す。「君は出鱈目だ」

「出鱈目なのはあなたよ。いい？ マラソンのときなんかね、あんなの盗るしかないじゃないの？ あれだけお膳立てができて盗らなかったなら私の恥だわ。自分から盗るように誘って置いて、それで盗ったら怒るなんて…罠に掛けられたようなもんよ」

「盗るように誘ってなんかない！」

「だいたいね、お金なのよ。私にくれればいいじゃないの？」

開き直りというよりは…彼女はどうかやら本当に自分は悪くないと思っている。地方によってはそういう習慣があるのだろうか、と一瞬迷うが…ないだろう。そんな習慣、現代の先進国で成り立つわけがない。ただ…彼女が事情を話さない理由がわかったような気がする。つまり…事情なんか特にないだ。彼女は単純にお金をちょろまかしているだけなんだ。

そう考えながらも俺は粘り強く尋ねる。

「法律を知っているか？ 他人のお金とか物とかを取っちゃいけないんだぜ？」

「知っているわよ。あかの他人のものは盗らないわよ。私はあなたのお金を盗っているのよ」

「付き合ってたってダメなものはダメなんだよ。そんな勝手な話聞いたことあるか？ “彼氏の金なら盗ってもよい”とかさ」

「そりゃ聞いたことはないわよ。そんなのわざわざ人に話すようなことじゃないもの。他の人たちがどうしているかなんか知らないわ」

あれ？ じゃ、口に出さないだけでみんなそうなのかな、と刹那戸惑う。が、そんなわけないだろう、と思い直す。しかし彼女が畳み掛ける。

「それにね、今まで付き合った人はみんな私にお金をくれたわ」

「その交際はもしかして…」

「前に勤めてたお店でも、いっぱい飲んでいっぱいお金を巻き上げても誰も怒ったりしなかった」

「…キャバクラだな？」

「フジコお祖母ちゃんも『盗ってもいいわ』っていつも言ってた」

「聞き間違いじゃないのか？」

「お祖母ちゃんのカツゼツは悪くない！」

「君の耳が悪いのかもしれない！」

「そうやってなんでもかんでも全部私が悪いことにするわけ？」

「そうじゃない！ 勝手にお金を取るのは悪いことだろ？」

「どうして？」

「どうしてって…盗られた人は困るだろ？」

「私はあなたのいろんな欠点を全部受け入れてきたのよ。ちょっとぐらい困るからって何よ？ 自分の都合ばかり考えて！」

「そういうことじゃないだろ？ お金ってのはな、大事なものなんだ！」

「私だってあなたに大事なものを捧げたわ！」

「そんなことデカイ声で言うな！」

「あなたが言わせたようなもんでしょ！」

「いいから話を聞いてくれ！」

「なによ！」

「お金ってのは一生懸命働いて、どうにか稼ぐものなんだ。心や体を消耗させて。そしてそれがなければ生活もできない。着る服も食べ物も住む所も確保できなくなる。生きていくことができなくなるんだ。君は単にお金を取っているだけじゃない。命を削っているんだ」

「なんて？」

「…どこから言い直せばいい？」

「ブイヤベースが足りないってところから…」

「そんな話してない…」

脱力して俺は黙り込む。……ダメだ。話にならない…というより、もはや言葉が通じてない。

俺は何もいわず立ち上がる。背中を向けた俺に例によって彼女が声を掛ける。

「この期に及んでお金も払わずにいくなんて最低よ」

「払わないよ、絶対に」俺は振り向かず、自分に言い聞かすようにそう呟いて店を出る。

しばらく歩いてから…気に掛かる。支払いは大丈夫だろうか？ 料理は高そうだったがちゃんと彼女のお金は足りてるだろうか？ 当然ルリ子は俺に払わすつもりでいただろうから、俺がカネを出さなかったことは想定外だろうに。困るんじゃないかな、と心配になるが、なんで俺がこんな後ろめたい気持ちにならないといけないんだ？ もう知るか！ 帰るぞ！

今月は出費が嵩んだなあ、と一人横になり思い返す。わかってる。原因はあの女だ。本当に…俺のカネを盗りさえしなければいい子なのに…。俺にはもったいないほどに。思えば俺のような大した取り柄もない三〇過ぎの男が、まだ二十三歳の若くて可愛い子と付き合うってことに無理があったんだろう。よく付き合ってくれたもんだ。…であれば、俺はもっと我慢するべきだったろうか？ お金を盗られるぐらいでちょうどよかった？ 馬鹿な話だ。それとこれとは話が違だろう。

ぼんやりとテレビを見ながら過ごす休日。ニュースでは領土問題が取り沙汰されている。隣国のとある島が資源に溢れていると知ったとたんに、突如その島の領有権を主張する国の話だ。どう見ても浅ましくて身勝手な主張なのに、その国の態度にはためらいも恥じらいも見えない。そういう国もある……か。

無茶な話だが、隣国だから関係を断つこともできないし、もちろん戦争するわけにもいかない。ましてその国に畏敬すべき文化遺産があったり、愛すべき友人がいたなら…どうにか上手くやっていくしかないかな。逃げ腰にならないよう、強く踏み込んで、でも殴るんじゃなく抱きしめる…みたいな感じかな。無理があるかな？ たぶん強く踏み込んだ時点で相手は攻撃を予感して臨戦態勢に入ってしまうから…そうなんだ、だから難しいんだ。

一人でぶつぶつと意見を転がしていたら、ニュースはいつのまにか次の話題……これも嫌な話だな。幼児虐待が増加しているとか。俺も子供は苦手だし、欲しいと思っただけでもないが…虐待なんか最低だ。なんでそんなことをするのか…え？「そんなことする気はなかった。でも言うことを聞かないので腹が立って、気が付いたら手を出してしまっていた」だと。何を言っているのか。子供なんて、いうことを聞かないのが当たり前だ。言葉をまだ充分には理解してないんだから。二、三歳でそこそこしゃべれるようになるから、なんかわかっているように見えたりするが、そんなの表面だけのことで、内実はまだ何にもわかっちゃいないんだ。話にはならないんだから、言葉じゃダメなんだよ。じゃ、どうすればいい？ つまり言葉以外の…背中で語るってやつかな。なるだけそばにいて、いっぱいかまってやって…それでも相当長い時間が掛かるだろう。大変だろうが、できるだろう。自分の子供なんだから。

気分が悪くなりチャンネルを回す。ワイドショーか…。話題はありふれた男女問題。暴力を振るう男、ギャンブルをやめられない男…そういう男と付き合う女がぼやいたり嘆いたりしている…。こういう話を聞くと、こんな最低な男さっさと別れちゃえばいいじゃねえか、と昔からよく思っていたが……今は少しだけ別れられない女の気持ちもわかるような気がする。それ以外にすごく良いところがあったりして、欠点さえ直してくれればって思いで縁を切れないというのなら…少しわかる。本当にあの子もカネさえ盗らなければ……

そんなときに、ピンポンと呼び鈴が鳴る。郵便ぐらいしか思い当たらない俺はさっさと玄関へ向かいドアを開ける。ルリ子だ。切なげな目で彼女は突っ立っている。一歩歩み寄り、俺を見上げる。

「なんだよ」と俺はぶつきらぼうにいう。ぞんざいな態度を取らないと喜んだことがばれそうで。

「やっぱり私あなたと離れたくない」ルリ子は曇りのない眼差しでそういう。

「どうして？」

「あなたは私の金づるだもの」

とうとう本音を隠すことすらしなくなったか…。もう怒る気もしなくなる。

「俺はもう君に寄付する気はないよ」もうカネを返せという気がしない。いえば確実に怒るし…

「寄付なんかしてくれなくていい。私があなたから盗るもの！ 必ず盗ってみせる。だから…」

「だから別れるんだよ」

「あなたと別れたら、私はこれから誰のお金を盗っていけばいいのよ？」

「誰のお金も盗らなければいいんだよ。お金に困っているわけじゃないんだろ？」

「全然困ってないわ」

「だから盗らなくても全然問題ないだろ？」

「あなたは何にもわかってない。盗りたいのよ、私は」

「盗られたくないんだよ、俺は」

「なんであなたはそんなに自分勝手なの？ いっつもやりたいようにやって、私は一度も満足させてもらったことがないわ」

「とりあえず部屋に入れ。中で話そう」そう言ってルリ子を部屋へ引っ張りこむ。鍵を閉めてから、改めて部屋の奥へ進んだルリ子を見やる。

彼女はいつも座っていたロングクッションに腰掛ける。いつも二人で座っていたロングクッションに。そして俺を澄んだ瞳で見上げる。俺はどこに座るか一瞬迷うが、いつもそうしていたように彼女の隣に座る。すると彼女は安心したような柔らかな笑みを浮かべて、うんうんと頷いている。よかったよかったといわんばかりに…

改めて思う。この子はたぶん本当にいい子なんだ。まるで邪気が感じられない。カネを盗ることに執着するが、卑しいという感じでもない。文化の違いなんだろうか？ だったら一度ちゃんと言って聞かしてみよう。発音もできるだけはっきりさせて。

「よく聞いてくれ」俺は彼女の目をしっかりと見据えて話す。

「うん」と従順に彼女は頷く。

「例えば暴力はいけないよね」

「いけないわ」

「それは他人であってもいけないし、家族とか恋人相手でもいけないよね？」

「もちろんよ」

「それはすごく痛いし、怪我するかもしれないし、その怪我は治らないことだってあるかもしれない。だからいけない。わかるね？」

「うん、当然よ」

「お金だってね、盗られると困る。これもあかの他人であっても恋人であっても困ることに変わりない」

「困らなければいいじゃない！」

「困るんだよ…」焦るな、怒るな、と自分に言い聞かせながら俺は続ける。「だってね、君だっ

て困るだろ？ 例えば俺が君のお金を盗ったらどうする？」

「ぶっ殺す！」空間が一瞬揺らぐぐらいの殺気を込めて彼女はそう言い放つ。気圧された俺はクッションからはみ出そうになる、が、なんとか体勢を立て直す。

「ほらね、腹が立つだろ？ 俺だってそうだ。同じように俺も腹が立つ」

「じゃ、腹を立てなければいいじゃない？」

「いや、あのね。君はそんなことができるか？ 俺にお金を盗られたら君だって…」

「ぶっ殺す！」俺の言葉を聞き終わらないうちに彼女はそう凄む。

「それはわかったから…」

「わかってくれたのね！」

「いや。今の『わかった』はそういうことじゃなくてね…まあ、とにかく君もそんなときに怒りを抑えることなんかできないよね？」

「うん」

「それと同じように…」

「そう、それと同じようにお金を盗ることを抑えることなんかできない」

あっけらかんと彼女はそういつて、にっこりと微笑む。

そういう習性ということか？ 蛍が光るように、トビウオが飛び跳ねるように、金戸ルリ子はお金を盗る…か。どうも名前も良くない。苗字が悪いわけでもない、名が悪いわけでもないが…カネトルリコとフルネームを読むと不吉な予感が忍び寄る。苗字を例えば俺の「イマカワ」にすれば、今にもすべてが変わっていくような気もするが…

しかしこうなってくると…言葉でいくら話してもいよいよ伝わる気がしない。じゃあ、どうする……子供と同じだ。背中で語っていくんだ。体と心で伝えていくしかない。そのためになるたけそばにいて、いっぱいかまってやって…長い時間を掛けて。きっと親子のように寝食を共にする暮らしが必要だ。ではどうすればよいか……

「結婚しよう」それは殆ど無意識で、コントロールできないまま、ふと口を付いた…いわばゲップのようなプロポーズ。いろんなことを飲み込んで、処理が追いつかなくなって、思わず出てしまったものだが…これでいい。ルリ子と一緒にしまえば盗られたカネもすぐ取り返せる。ってかいろんなものを共有することになれば…盗られることの意味すらなくなるんじゃないか？

ルリ子はしばらくあっけに取られる。俺を見たまま口も半開きで固まっている。しかしやがて目に涙が滲む。顔を赤くしている。心に明かりが灯ったような暖かな微笑み。そしてルリ子は俺のゲップに対して、しゃっくりのように返答する。

「はいっ」

「ちゃんと聞こえた？」聞き返されたような気もして、俺は思わず確かめる。

「ちゃんと聞こえた」

「なんて聞こえた？」

「“結婚しよう”って」

「よかった」伝わってた。

「目を見てればちゃんと伝わるのよ」涙を拭いながら彼女はそうはにかむ。

ルリ子の家族

ことは順調に運んだ。なんせ俺の両親なんかは大喜びだった。ルリ子が挨拶に来たときに、「こんないい子が嫁に来てくれるなんて」としみじみと語っていた。そりゃそうだ。ただ一点を除けば本当にいい子なのだから。

ルリ子は俺の無愛想な父親とも落ち着きのない母親ともちゃんと話を合わせられる。特に気を使うわけでもなく、見え透いたお世辞なんかもいわず、本当に打ち解ける。まあ、考えてみれば人間嫌いの俺と付き合えるぐらいだから、恐らく誰とでも上手くやっっていける子なんだろう。

むしろ表面的には俺のほうに多くの問題がある。しかしルリ子の両親に挨拶に行ったとき、両親とも歓迎してくれた。とくにルリ子の母親はルリ子に似て、気が利くというか穏やかで気さくで、俺のことを自分の子供のように接してくれた。

結婚に当って一番の問題点は俺の経済力であろうが、それについても深く言及されなかった。いや金銭の話は出たのだが、母親は、「そんなに莫大な財産を持ってなくたって、人はちゃんと幸せになれるからね」と気遣うように語ってくれた。「もちろんルリちゃんがお金を盗れるぐらいの余裕は必要だけどね」と付け足したのが気になったが…

ルリ子の父親はすっかり禿げ上がっていた。なんでも大学で人類学を教えているとか。

大学教授は変わり者が多いと聞くと、この人もやはり変わっているようで、さほど娘の将来を案じていないように見えた。というか、まるで俺に興味がないようでもあった。それでもちゃんと話はしてくれた。人類学の話。大陸が東西に伸びているか、南北に伸びているかで文化の伝播速度が違うとか…、病原菌は結果的に人間を死に追いやってしまうこともあるが、病原菌にとって人間は住処であるから、病原菌は人間を殺そうとしているわけではなく、実際に人間を殺さないようにウィルスの毒性が弱まっていった病気もあるだとか……話に興味をもてない俺は「はあ、なるほど」と相槌を打ち続けるほかなかった。

ルリ子の弟はまだ高校生。部活があるからとすぐに出かけてしまったので、あまり話していないが、部活は野球部で、盗塁が得意らしい。足が速いわけではないがピッチャーのモーションを盗むのが上手いだとか。ピッチャーの呼吸やクセでタイミングを計るそうだが、その技術は先輩から盗んだとか。授業中にも先生の目を盗んで盗塁のイメージトレーニングをしているだとか。そんなんだから勉強のほうはいまいちだが女子のハートを盗むのは上手いだとか……俺は何か言いたくなるのを我慢しながら、その話を聞いた。

式は両家の家族だけのこじんまりとしたものにした。披露宴は行わず、その代わりに友人たちに結婚祝賀パーティーを開いてもらった。友人たちといってもほとんどルリ子の友人で俺の友人はちょうど四名のみ。そのうち三名はわざわざ俺の故郷から来てくれたのだが……パーティーへの出席を口実にしてちょっと都会へ来てみたかっただけのようで、あまり俺に興味を示さず、その三人同士で何かしら楽しそうにしていた。彼らが俺に掛けてくれた言葉は「同窓会にもおまへは来ないし、死んだんじゃないかって話もあったんだぜ？」といった具合でからかいが主だった。

残りの一名は俺の友人の中で一番成功している平森というゲームプログラマー。この男は会うたびに俺を自分の勤める会社に誘ってくれるのだが、このときもトイレで会ったときに、やはり挨拶のように、

「所帯を持つならカネもいるだろう？　うちの会社に来ないか。手伝ってくれる人が欲しいんだ」と勧誘してきた。

「無理だよ。おまえの会社受けたって面接で落ちる。話したろ？」と俺は応じた。

なんせ俺はかつてゲームプログラマーの専門学校に通っていた。そして当時ゲーム制作会社の採用試験を何社も受けたが、片っ端から面接で落ちたのだ。そのことは以前にも平森へ伝えたはずなのだが、彼は呆れたように語る。

「それは君がさ、履歴書に自分の性格について『人間嫌い』とか書いてたからだろ？　将来の展望を聞かれたときに『あと十年は生きていないと思う』とか答えたり。そんなやつを採用するわけじゃないじゃないか？」

「そのときはそう思ってたし、正直に話したかったんだよ」

「『そのとき』？　じゃ、今はそう思ってないんだろ？」

「まあ…人間嫌いは変わらないが…十年以内に死ぬ気はないな」

「そのぐらいなら、まあ大丈夫だよ。僕の知り合いつてことで少しぐらいは大目に見てくれると思う」

「俺自身に自信もないんだ。今さら…ちゃんと仕事ができるかどうかって点で…」

「僕がちゃんと教えるよ」

「そこまでおまえの世話にはなれないな」小さなプライドの作用で俺はそういうが、彼は俺が遠慮していると思ったようだった。

「気にしなくていいよ。はっきりいうとね、僕は後十年ぐらいは遊んで暮らせるだけの貯金はあるんだ。だからね、あとはもっと楽になれたらいいなって思うんだ。なるべく周りに気を使わずにさ。もともと僕も人付き合いは得意じゃないからね。だから…君がいると助かるんだ。なんかね、君と話すのは楽なんだよ」

「それはおまえが俺を見下しているからだよ」

「そんなことないよ」と、そんなことありそうな半笑いで彼はいう。

「まあ、考えとくよ」と俺はいつもどおりの言葉で話を終わらせる。ただ今回は間に合わせの回答ではなく、本気でそう答えていた。考えておこうと。なんせ…カネは入用だ。今までのことのない残業を目一杯やって、どうにか結婚費用をまかなったが……生活はかつかつだ。

～三十歳～ 俺の重大ニュース

- 金戸ルリ子と出会う
- フルマラソンを完走
- 金戸ルリ子と結婚

新生活

結婚費用こそ掛かったが、同居した分その後の生活は意外と楽だった。新居は駅から徒歩一〇分の立地で、間取りは2Kで、家賃が七万五千元。二人で出し合えば今までより安く付く。

ルリ子は料理が上手い。家事も好きなようで、洗濯も掃除も買い物もしてくれる。ゴミ出しと皿洗いだけが俺の仕事。週四とはいえルリ子も働いているのに…そして俺の稼ぎなんか知れているのに。本当に…申し訳なくありがたい。

ただお金はちゃんと盗られた。なるべく財布は鍵の掛かる机の引き出しにしまっていたが、面倒なときは机の上にそのまま置きっぱなしにしていた。そしてそういうときは…だいたい盗られた。だがあまり気にならなかった。そもそも家計は二人で出し合っていくことになっていたし、公共料金は俺の口座から落とすということ以外は特に取り決めも設けてなくて、ケースバイケースでやりくりしていたし。そして普段の買い物はほとんどルリ子がしてくれているわけで、盗られたカネも結局は、食料費やら雑費やらに回ることになる。だから家計の管理をルリ子に任せていると考えればそれは本当になんでもなかった。俺からせしめたカネで彼女はバッグやアクセサリーを買うこともあったようだが、時々はそれもいいだろうし。もちろん突然に財布の中のお札がすっかり消えていたら困ることもあったのだが、小銭で食費はクリアできたし、交通費も定期をいつも使っていたから、さほど困ることにはならなかった。まあATMへ駆け込むことは増えたが…なにせよ大したことじゃない。

そんなんだから結婚生活は順調だったといえる。俺が彼女から盗られたカネを取り返すまでは…

受け継がれてきたもの

散髪をしようと決めていた日にふと財布を見ると三〇〇〇円が消えていた。先にATMに寄るのは遠回りでも面倒だな、と思いながら何気なくルリ子の様子をうかがうと、彼女は洗濯物を干しにベランダへ出ていた。そして箆の脇には彼女のバッグが無警戒に放り出されてある…

お金を返せといえば彼女は憤慨する。散髪をするのでカネを出してくれといえば出してくれるかもしれない。しかしそこにあるのはそもそも俺が稼いだ俺のカネだ。それにいい機会だ。行く行くは彼女の習性は治していったほうがいいだろうし……

そう思って俺は彼女のバッグから財布を漁った。後ろ暗い気持ちにもなったし、見つければ彼女は怒るだろうなと畏怖の念すら抱いた。でも…俺のカネだ、俺には何の罪もないと自分に言い聞かせて、彼女の財布から盗られた分の三〇〇〇円を抜き取った。

その日俺はびくびくしながら散髪から戻ったが…ルリ子に変わった様子はなかった。「おかえりなさい。あっ、散髪したでしょ！ うん、そのほうがいいわ。さっぱりしてて」といった感じで。そのときは気付いていなかったようだ。

その日の夜に少し変化はあったようだ。晩飯を食べながら…何か言いたそうにしていた。「ねえ」と彼女は怪訝な目で俺に問い掛けた。「あなた何か隠してない？」

「何も」と俺は即答した。答えるのが不自然に早かったので、疑われないだろうかと不安になったが、そもそも俺にやましいことなどない。堂々としていればよいのだ。

「本当に？」ルリ子がやはり訝りながら問いを重ねる。

「もちろん」と俺は答える。「浮気なんかはしないよ、俺は」

「そんな心配してないわよ」と彼女はいう。やはり…彼女の心配はお金のことなのだろう。彼女は続ける。「人の道に外れたようなことはしないわよね？」

「しないよ」

「そうよね…いくらなんでも」と彼女は首を傾げてはいたが、それ以上は言及しなかった。自分の思い違いと思ったようで、その後はただテレビに見入っていた。

その数日後、今度は定期が切れた時だった。俺はその日、三か月分の定期を購入しようと思っていた。しかし出かける前に財布を確認したら、例によってお札がすべて消えていた。このときは鍵の掛かる机の引き出しに財布を仕舞っていたのだが、ルリ子はその鍵を壊して引き出しを開けてしまったようだ。

ATMに寄る時間もなくなっているが…今回は金額も大きいし、ここは取り返そう。そう判断した俺はルリ子がトイレに入っているのを確かめて、彼女のバッグから財布を取り出した。そして速やかに彼女の財布から盗られた分の四万円を抜き取った。

その日仕事を終えて帰ると、部屋に入った瞬間に空気が引きつっているのを感じた。部屋の中をうかがうと、ルリ子は肩肘をついて横たわり、微動だにせずテレビを見ていた。しばらく彼女は何もいわず、部屋にはテレビの声だけが響いていた。流れているのはルリ子が普段見ないニュース番組…。ある国が戦争で奪い取られた島の返還を訴えていて、返還を求められた側の国が硬い態度で不快感を示しているといった話…

「ただいま」と声を掛けてみても、彼女はしばらく動かない。寝ているのかと思ったが、彼女はやがてゆっくりと座り直した。そして「ねえ」と声を掛けてきた。無表情で…

「なんだよ」と俺は怯えながら答えた。

「今日財布の中のお金がなくなってたのよ」ゆっくりと怒りを押し殺すように彼女は話す。

「そう…」俺は何故だかしらばつくれるように応じる。

「空き巣でも入ったのかしら？ だとしたら警察に行かないといけないわ」

「警察には行かなくていい」俺は慎重に答える。

「どうして？」

「空き巣は入ってないから」

「じゃあ、誰が盗ったわけ？」

「…………盗ったわけじゃない。元々俺のカネだ」

「やっぱり…あなたなのね？」

「そうだ。何が悪い？ 俺は自分のカネを取り返しただけだ」

「取り返したですって？」

「そうだろ？ 君が俺のカネをまず盗っただろ？ 俺はそれを取り返しただけだ」

「私があなたのカネを盗った？」

「盗っただろ？」

「盗ったわよ」

「だから…」

「せっかく盗ったお金を取り返すなんて…」何か俺が不潔なことをしたみたいに、彼女は睨む。

「なんでそんなことしたのよ？」

「それはそもそも俺の科白だ」

「どうしてよ？」

「他人のお金を盗っちゃいけないからだ」

「なんで今になってそんなこというのよ？」

「今までだって許してたわけじゃない！」

「結婚したじゃないの。私たちは！」

「それがなんだよ？」

「いくらでもお金を盗っていいってことでしょ？」

「違う、結婚にそんな意味はない！」

「話が違うじゃないの！」

「どこにそんな話があった！？」

「酷い…」

彼女はさめざめと泣き出した。何なんだ、この状況は？

俺は一人でメシをよそってテレビを見ながら、それを食べる。ルリ子は泣き止まない。何故かルリ子が可愛そうになって優しい言葉を掛けてやりたくもなるが…悪くもない俺が「ごめん、悪かった」というわけにもいかない。

何もいえないまま、気まずい俺は風呂に入った。そして風呂から出ると彼女はいなかった。「実家に帰ります」と書置きだけ残して。そんなことで実家に帰るなよ、と思いながら、仕方なく俺は服を着た。ドライヤーで髪を乾かして、身支度を整えて。予想通り財布から俺の残金は抜かれているから、別に分けてある現金を財布に補充して、俺はルリ子の実家へ向かった。なんせ近いのだ。二駅しか離れていない。

「遅くにすみません」と俺は玄関で義母に…つまりルリ子の母親に謝る。「ルリ子さん来てますよね？」

ルリ子の母親は警戒するような目で俺を見据える。前はあんなに優しくかったルリ子の母親が…どうやら敵として俺の前に立ちはだかっている。

「来てますし、話は聞いています」と彼女はいう。「まあ、上がってください。ここで話すようなことでもありません」

居間に通され、ソファに座らされる。お茶を出されて、それに口を付ける。ルリ子の父親は不在のようで、俺の目の前にはルリ子の母親が一人…

「ルリ子さんは？」と俺は訊く。

「いますがね、合わせられませんね」

「合わせて下さい。話がしたいんです」

「私もあなたに話があります」とルリ子の母親は重い口調で告げる。「口に出すのも汚らわしいのですが…あなたはあの子が盗ったお金を取り返したそうですね」

「はい…」と俺は答えてしまう。汚らわしいという点にも同意したみたいで、そこは訂正しようと思うが、ルリ子の母親が、

「あなたは恥ずべきことをしました」と畳み掛ける。「あなたはルリ子を裏切ったんです。あの子は…深く傷ついています」

「しかしですね」と俺はいう。「そもそも俺のお金なんですよ？ 正直にいうなら俺がどうして責められているのかわかりません」

「そもそもですね」とルリ子の母親は俺の言葉を聞き流して続ける。「正直にいうなら私は最初不安でした。なんともあなたは頼りなさそうでしたからね。でもね、真面目そうな誠実そうな人だから結婚を許したんです」

「はあ…」そういわれると俺は何もいえない。

「ルリ子も言ってました。『お金を盗ると、ちょっとは怒ることもあるけど本気じゃないの。いつも最後には許してくれる優しい人なの！』ってね」

「はあ…」本気で怒っていたつもりだし…別に許した覚えもないんだが…そう解釈していたのか…。ルリ子の母親はそのときの様子を目に浮かべるように続ける。

「そんなことを熱く語るんです。親バカかもしれませんですが、天使のような笑顔でね。こうもいつてました。『暴力に訴えたりだとかお金を取り返したりはしない、物の分別のある人だ』ってね。……あの子はあなたを心の底から信じてたんです。あなたはそんなあの子を裏切ったんですよ？」

「俺はでも…何も…あの子が嫌がるようなことはしてないはずなんです」

「反省したようですね」聞き違いがあったのか、思い込みの作用なのか、彼女はそう呟く。

いえ、反省はしてませんと言いつけるが…話がこじれるのを恐れて俺はそれを踏みとどまる。「まあね、うちの主人も若いころはそういうこともありましたからね。若気の至りなのか、魔が差すということがね」

「失礼ですが」俺は気になったことを尋ねる。「お義母さんも…お義父さんのお金を盗んでらっしゃるんですか？」

「何を言っているんですか？」やれやれといわんばかりに、彼女は呆れた様子で応じる。「もちろん私も主人のお金を盗りますよ」

「はあ…」やっぱりそうなのだ。親から受け継がれた習性なのだ。そういえば前にルリ子が言っていたっけ？『フジコお祖母ちゃんも“盗ってもいい”って言ってた』とか…

「もしかして」と俺は改めて尋ねる。「お義母さんのお母さんもそうだったんですか？」

「ルリ子からは聞いてませんか？」

「お祖母ちゃんも…窃盗の許可を出してる旨の話は聞きましたが…」

「私は母とはね、ほとんど一緒に暮らしてませんでした。母の弟夫婦に預けられてましたからね。私が物心ついたときには父は亡くなっていましたし、母は子育てとかは“性に合わない”とかでね。今にして思えば“性に合わない”で育児を放棄するなんて無茶な話ですが、幼い私はそういうものなのかと受け入れていました。そんなことで母は滅多に会いに来ませんでした。会えばいろんな話をしてくれましたよ。どこかの国王から二億円の首飾りをもらったとか、伝説の秘宝をぶん盗ったとか」

「ぶん盗った？」

「母はね、世界を股に掛ける大泥棒と行動を共にしていたそうです。まあ、どこまで本当なのかはわかりません。なんせ母が私を産んだのは五〇歳を過ぎてからでしたからね、私にそうした話を聞かせてくれたころはもう年寄りです…嘘も恐らくは混じっていたことでしょう。その大泥棒との関係性もあやふやでしたからね。仲間であったこともあれば、その敵につくこともあったようです。恋人のように話すこともあれば、他人事のように話すこともあったり…よくわかりませんよ、私にも。ただその大泥棒は苦労して手に入れたお宝を母にちよろまかされても、それを取り返すようなことはしなかったそうですよ。『フジコのやつめ』と口惜しそうにするだけでね」

話の内容はよくわからんが…ルリ子の習性は代々受け継がれてきたもののようだ。…そういえば猫は食べもしないスズメやネズミを捕まえてくるらしい。かつて猫の祖先は小動物を捕まえて食べる暮らしをしていて、その名残で現在の猫にもそうした習性が残っているのだとか…

それがもはや遺伝子に刻まれて本能と化したものであるなら…それを治すのは俺が思う以上に困難なことだろう。そう思うと…俺は少し早まったかもしれない。もっとじっくりやるべきだったかもしれない。

「お義母さん」俺は意を決して訴える。「お願いします。俺に時間をください。ちゃんとやり直したいんです」

「いいでしょう」とルリ子の母も、俺の真意はともかくとして俺の言葉には同意する。「主人もお金を取り返さなくなるまでには時間がかかりましたからね。あなたにも時間をあげますよ」

「ありがとうございます」と俺は深々とお辞儀をする。

ギシと微かに階段が軋む音がする。見るとルリ子が降りてくる。ルリ子はどうやらそこで俺たちの話を聞いていたようだ。泣きはらしたのかその目は真っ赤だ。ルリ子は歩み寄り、熱い微笑みで未来を見据えるように、俺に語りかける。

「生まれ変わらないといけませんね」

「やかましいわ！」と言いついそうになるが、どうにか俺はその言葉を飲み込み、言葉を選びながら彼女に告げる。

「俺に焦りがあった。もっとよく考えるべきだった。頼む。帰ってきてくれ」

「わかりました」と彼女は目を光らせて答えた。

二つのことを思った。一つ…俺のお金は汗水たらして働いて、必死にどうにか稼いだものだとわかってもらえばそうそう盗れなくなるんじゃないか、ということ。二つ…とりあえずもう少し収入を増やして、盗られても困らない程度の貯金を蓄えよう、ということ。

思ったのは二つのことだが、起こす行動は一つだった。平森が勤めるゲーム制作会社に正社員として雇ってもらおうのだ。そうして平森に連絡を取ると、

「そうか、やっとやる気になったのか？」と彼は嬉しそうに応じてくれた。

「やる気になったっていうか…嫁に何かとカネが掛かるんだ」

「ブランド物にでも凝ってるのか？」

「そんな女じゃないよ。まあでも、いろいろあるんだよ」

「わかるよ。女ってのは何かとカネが掛かるもんだからね。洋服をいっぱい持ってるくせにすぐに新しいのをせがむし、アクセサリーもなんだかんだと欲しがるとさ。ま、僕に寄ってくる女はそもそもが金目当てなのかもしれないけど」

話の種類がちよっと違うな、と思いながらも、「おまえも大変そうだな」と俺は適当にいう。平森はそれを打ち消すように話す。

「いや、いいんだよ。カネが掛かるぐらいは。税金みたいなもんだ。そういうもんだと割り切ればなんてことない。二股掛けられたり、浮気されたりとか…そういうことに比べればね。そういうのは本当に心を抉り取られるような、切り裂かれるような…まあとにかくポロボロにされるからね。割り切りようがないほどに。そういう意味ではカネが掛かるぐらいなんてことないよ、本当に」

……彼にもいろいろあったようで、なんか本当に大変そうだな、と思う。

「まあ、とにかく」気を取り直すように彼が改める。「ちゃんと君のこと話しておくからさ。大丈夫だよ。それから君は君で勉強しておいてくれ。僕がいろいろ教えるけど基本的には即戦力が求められるはずだ。それに採用試験では作品審査もあると思うから、何かゲームを作っておいてくれ。また連絡するよ」

「わかった。ありがとう」

採用試験提出用ゲーム

ジャンル シミュレーション

ゲーム概要

人生ゲームのアレンジ。主人公が人生において浮き沈みしながらゴールを目指し、より多くのお金を得たものが勝ち。人生ゲームと違うのは、恋人の魅力ポイントによってモチベーションポイントが上がり、モチベーションポイントが収入の増加につながるという仕組み。そのため「就職」でつまづいても、よい「恋人」に恵まれれば大逆転もありえる。ただ収入の増加が新たな「恋人候補」を増やし、またモチベーションポイントが上がるという好循環もあ

るが、「恋人候補」の扱いを間違えるとトラブルに発展し損失となる場合もあるので大陥落もありえる。いわば人生ゲームと恋愛シミュレーションゲームの融合。

…必死に勉強して俺はこんなゲームを作っておいた。ブランクがあるとはいえ専門学校で学んだ俺には基礎はあるのだ。それにわからない時は平森に連絡を取って教えてもらえた。まあ、このぐらいのことはできる。

そして出来上がるころに平森から連絡があり、試験を受けることになった。そして…すんなり採用が決まった。俺が思う以上に平森は会社で信頼を得ているようで、経験不足や人間性はとくに引っ込まれることもなかった。俺が作ったゲームについて面接官を務めた社長から、「細かいところをもっと丁寧に作りこんでいったほうがよい」というダメ出しはあったが、「そこを直して、あとキャラクターももっと魅力的に描けば使えるかもしれない」という励ましもあり、まあ順調にクリアしたといえる。

職場では平森のチームに配属となり、ほぼ平森の指示通り動いた。サポート的な仕事しかなく、自分が何のゲームのどういったことを作っているのかもわからないようなこともあったが、それでも以前の仕事より収入は増えた。以前が月の手取り十五万円そこそこだったのが、手取りで二十万近くもらえるようになったのだ。残業も多くて過酷ではあったが、家計は楽になったようだ。

だから…しばらくはルリ子がお金を盗っても取り返さずにいられた。もちろん予め盗られないように気をつけてはいるのだが、財布の置き場所を変えてもすぐに彼女は見つけてしまう。パズルを解かないと開かない貯金箱に仕舞ってみても彼女はパズルを解いてしまう。重い本棚を動かしてその裏に隠せば、盗られることはなかったが俺の方がいちいち本棚を動かすのが面倒になってその隠し場所を諦めた。

盗られないために策を弄することに関しては、ルリ子の気を害することはなかったようだ。やりがい搔き立てられたのか、「負けるものか！」と楽しそうにすらしていた。そうしてちょくちょく彼女にカネを盗られ、俺はそれを取り返しもせず、ただただ仕事に励む、という生活を送っていると……………幸せだった。

そりゃそれほど裕福ではないが、高望みさえしなけりゃ不自由を感じることもない。豪華な料理は食べれないが、ルリ子が心を込めて料理を作ってくれる。仕事はくたびれるが、疲れて帰るとルリ子が肩を揉んでくれる。休日出勤や残業も多くて旅行なんかにはいけないが、部屋で一日ルリ子と話していれば俺は充分楽しめる。だからつまり…俺はルリ子がいればそれでよいのだ。お金をちよろまかされることだって、新しい税金だとも思えば割り切ることができる。

幸せを守りたい俺はルリ子からカネを取り返しなくてもいいかな、とも思った。彼女の習性を治せるならそれに越したことはないが、治せないならそれはそれで仕方ないかと。そんなふうにも思えてきた。

～三一歳～ 俺の重大ニュース

○ルリ子、カネを取り返されて憤り実家に帰る

○ゲーム制作会社へ就職

「私ね」あるとき布団で二人並んで寝ているとき、ルリ子はこう切り出した。「最近幸せなんだよ」

「俺もだよ」

「あなたを選んでやっぱり良かった」

「ありがとう」

布団の暖かい心地よさが心にまで染み渡ってくるような、そんな時間だった。だが彼女はこういった。

「本当はね、あたし最初はあなたを蹴り殺そうかとも思ったんだよ」

「え？」

「だってあなた最初のころ、私が盗ったお金を取り返したことがあったでしょ？」と、俺の失敗を茶化すかのように彼女は話す。

「うん…」深く考えずに俺は頷く。

「その時はね、本当にこの人はどうしてこんな酷いことをするんだろうって思ったんだ。むごたらしいというかおぞましいというか……こんな人この世にいないがほうが絶対にいいってね、思ったの」

俺はただ愕然とする。…そこまで思われてたのか？

「でもね」ルリ子ははにかんで続ける。「こんな酷い人でも、この人なりの過去とか事情があつてそうになっているんならね、無下にしちゃいけないって思ったの。こんな人でも取り柄はある。時間さえかければきっと人は変わっていけるってね。そのために私はあなたの成長を見守らないといけないと思ったの。だって私はあなたの妻だもの。そしたらね、あなたちゃんとお金を取り返さなくなったわ！ 私すごく嬉しかったんだよ。想いが通じたって思って。あなたは人のお金を取り返す醜い生き物からまともな人間に生まれ変わったんだもの。それってすごく立派なことだと思うの。自分の過ちを悔い改めて行いを正していけるってさ。これならいろんなことを乗り越えていけるって思った」

そうかそうか…ルリ子はそんな優しい目で俺のことを見守ってくれていたんだな、そして醜い生き物である俺が盗られたカネを取り返さないまともな人間になることを祈ってくれていたんだな、自分の過ちを認めるのを待っていてくれてたんだな……って、何だそれは！？　なんで俺が間違ってたことになっている？　俺が醜い生き物？　俺はそれを自分で認めて悔い改めたってのか？　俺は俺は俺は、ただただただ、じっくり時間を掛けて彼女と向き合っていこうとしていただけじゃないか？　間違ってるのも悪いのも彼女だろう！？　これでいいのか？　よかないな。

そう思うが言葉がすぐには出ない。「おい」と言葉を掛けたときには彼女はもう安らかな寝息を立てている。燻ったまま俺は夜を過ごす。

その後俺は考えを改める。とりあえず財布を面倒でも本棚の裏に隠すようにする。それでしばらくルリ子に盗られることはなかったが、ある日ルリ子は本棚を倒して財布を取り出し、お金

を盗っていた。俺は仕方なく寝静まってから彼女の財布から盗られた分を取り返しておいたが…彼女はすぐに気付かなかった。俺を信じているようだ。そう思うと胸が痛んだが、俺は正しいことをしているんだと自分を信じた。

いちいち本棚を倒されても困るので、俺は鍵付きのキャビネットを購入する。しかしそのキャビネットもまもなくルリ子に鍵を破られ、彼女はあっさりとかねを盗る。鍵は本の中に隠してあったのだが…彼女はそれを見つけてしまったようだ。そしてまた俺は盗られたかねをこっそり取り返す。彼女は疑いの目で見したが、俺はそれを気にしない。

俺は財布を見つからないように机の裏にガムテープで貼り付けるようにもしてみたが、彼女はすぐにそれを見つけてお金を盗る。俺はまた寝静まったときに彼女の財布を漁るが、そこで彼女は警戒していたのかすぐに目を覚まし、電気を点ける。

「なんてことしてんのよ！」

「俺のかねだ！」

「この期に及んで何寝ぼけたこと言ってんのよ！」

「寝ぼけているのはそっちだろう！」

「いい加減にしなさいよ！」

「君が盗らなければ済むことだ！」

「あなた前に私のお母さんに叱られて反省したんじゃないの？」

「反省したんじゃない。焦っちゃいけないと思い直しただけだ！」

「だましたのね!？」

「違う。ただの君の思い違いだ！」

「酷い…いまさらそんなこというなんて…」彼女は怒りよりも哀しみが深いようで、その後声を荒げなくなった。が、静かに諭すように「お金を戻しなさい」と続けた。

「だから俺の財布に戻す」

「私の財布に戻すのよ」

「ダメだ」

「あなたは…また根性が腐ってしまったのね？」

バチツと俺は彼女の頬を平手で打つ。さすがに…胸が痛む。でも仕方ない。もう…どうしようもない。クソ、だめだ。正しい筈なのに…正しいことを貫こうとすると良いことが何もないなんて…

「まだ時間が掛かるみたいですね？」とどこか人形のような顔でルリ子はいう。悲しみに耐え切れず、感情を押し殺してしまったように…

「ああ、時間は掛かるみたいだ」俺はしっかりとはっきりとそう告げる。

「長い目で見ます」それだけいって彼女は再び布団に入る。俺に背を向けて彼女は眠る。俺も彼女に背を向けて寝る。自分の財布を握り締めたまま。

金庫を買った。ダイヤル式のもので「右に何回、左に何回、右に何回…」と回して鍵を開けるものだ。七万円もした……………なんで嫁からかねを守るためにこんなにかねを掛けなければならな

いのか、と愚痴を零しながら俺はそれを部屋の隅に設置した。まあでもこれでもうさすがに安心だろうと思った。

それからときどきルリ子が金庫破りに挑戦しているのを目にしたが、さすがに開けられないようだ。そしてそのうちに彼女は諦めたようで金庫に近づかないようになった。だからカネを盗られるのは俺が財布を金庫に仕舞い忘れたときだけだった。

そんなときは仕方なく彼女の財布からこっそりと取り返した。彼女もそれを警戒するようになり、おもちゃの貯金箱を買い、そこに財布を仕舞うようになった。おもちゃとはいえ開けるには鍵と暗証番号が必要な物で、俺は困って迷った挙句に、その貯金箱を金鎚で叩き壊した。ただのおもちゃとはいえ……耳を劈く破壊音が俺の心にも突き刺さった。ルリ子は壊れたおもちゃの残骸を見ると、涙を流してつぶやいた。

「あんまりよ…。壊すなんて」

「ただのおもちゃだ」俺はよろける自分を守るためにことさらに強く言い放った。

「あなたが壊したのはおもちゃだけじゃないわ…」と微かにいって彼女は俺から目を逸らした。

金庫によってまず盗られることはない。うっかり盗られても取り返す。そうしているとやがてルリ子はお金を盗らなくなった。うっかり財布を出しっぱなしにしている…俺のカネが減っていなかったのだ。

何かの間違いかとも思って、残金を正確に把握するようにしたが、やはりその後は金を盗られなかった。

いやいや、まだ安心するには早いだろう、とも思い俺は確かめてみた。外食したときに、「トイレに行くからこれで払っておいてくれ」と財布を渡した。たつぷりと時間を置いてから俺は戻ったのだが、代金以外にお金は減っていなかった。

それも三度試した。そして一度も彼女はお金を盗らなかった。分厚い雲が裂けて光が差したようだった。嫁がお金を盗らない…なんて素敵なことだろう！俺はただただ感動した。どうせ取り返されるからと諦めたのかもしれないが…でも大きな転換だ。彼女は変わったんだ。これからは真に素晴らしい暮らしが始まるんだ！ただ……彼女は随分とやつれていた。顔色にも生気がない。若葉のように生き生きしていたのに……

彼女がお金を盗らない日々が半年ほど続いた。口数はめっきり減り、相変わらず家事はちゃんとしてくれるのだが…料理には愛情が感じられなくなった。毎日がカレーで…別にそれは悪くないのだが、…何かそっけなく、工夫もなく、エサでもやるように俺にメシを出すようになった。疲れているんだな、と思って俺は多くを望まなかったが…ルリ子が笑いかけてくれない寂しい日々が続いた。

そのうちに回復するだろう。楽しい暮らしが戻るだろう。そう自分に言い聞かせて、俺は毎日を過ごしたが……脱税でもしているような後ろめたさが心の中で淀んでいた。

ある時小学生のときのクラスの同窓会の知らせが故郷から届いた。今までは肩書きや境遇が情けないやら恥ずかしいやらで同窓会などは不参加だったのだが、一応定職にも就いたし、結婚もしたしで、参加することにした。

「さ来週の土曜日、同窓会なんだ。せっかくだから二、三泊してくる。木曜日の夜から夜行バスで行って、日曜日の昼の新幹線で戻るから日曜の夕方ごろに帰ってくる」と俺はルリ子に報告する。

「そう…」別にどっちでもよいといわんばかりにルリ子は頷く。会話のすべてがどこか気まぐずい……この気まずさから逃れることができると思えば、この同窓会も都合だ。家を三晩空けることになるが、もう彼女もお金を盗ろうとはしないだろうし、万一盗ろうとしても金庫は開けられやしないし。問題はない。

同窓会で幸せそうな家庭を築いている奴を見て、どこか引け目を感じて、少し前までは俺も幸せだったはずなのに、と悔やんだりして、同時にルリ子に少しよい服でも買ってやろうとか、旅行に連れてってやろうとか、そんなことを考える。

そして俺は予定通り日曜の夕方に家に戻る。ルリ子は不在のようで部屋は薄暗い。電気を点ける。部屋全体がどうもさっぱりしている。ふと…重い扉を開いた金庫が目につく。まさか、と思い俺はその中を見る。現金と通帳、印鑑がそこにあるはずなのだが、現金は当然のように消えている。通帳と印鑑はあるが……通帳を開くと残高が五万ちよつと。一〇五万円のところから百万引き落としたようだ。五万円も残してくれたというよりは…ただキリの良い金額を引き落としたように思える。………呆然とするが、呆然としている場合でもない。ふと見ると座卓の上に見慣れない用紙があり、それを確認すると離婚届。…記入は殆ど済ませてあって、後は俺の署名と捺印だけとなっている。その横には置手紙。

「取り返しに来ないでください。ルリ子」

………結局俺は幸せになんかなれないのか、結婚生活なんか無理なのか、百万円も盗っていくなんで結局あいつにとって俺は金づるでしかなかったのか、もうこんなこともやってられないし、全然力も入らない。だってあいつは俺よりお金を選んだのか？ いやだいやだ、もう疲れた、もう考えたくもない、なんのために俺は今までがんばってきたんだ？ え？ ルリ子の笑顔を見るため？ あいつは笑顔なんかとっくになくしてた。笑顔を奪った俺が悪いってのか？ 自業自得？ そんな馬鹿な。どうしてこうなったんだ？ 最初から間違ってた？ 水中で服を乾かすような、真空中でペットを飼うような、無茶なことだったのか？俺とルリ子は結ばれる宿命では無かったのか？ もういい疲れた。俺は正しいことしかしてないじゃないか？ 正しくないことをしるとでもいうのか？ もういい、もういい。どうしようもない。忘れよう。さようならだ………

………
って、このまま終われるわけがないじゃねえか！ 明日は早い。帰ったばかりで疲れているが、どうせ実家だ、すぐ行こう。通帳を見るとカネを下ろした日付は金曜日。早いほうがいい。

ルリ子の実家で待ち構えていたのはルリ子の父親だった。ドアを開いて俺を見るなり苦々しい顔をして、重い咳払いをした。その喉の奥に不穏な感情が絡みついているようだった。

「突然すみません」と俺は頭を深く下げる。

「いや、別に…」義父は苦々しい顔のまま…

「ルリ子さんはいますか？」

「ルリ子は君には会いたくないといっている」

いるんだな……と気付いて俺は一安心してしまうが、安心するにはまだあまりにも早過ぎる。

「お願いします。合わせてください」

「私はね」重々しく義父は語りだす。「はつきりいつて君を許せないんだ。ルリ子は随分憔悴していた。眩いぐらいに美しかったのに…うつろな目で今もぼんやりしているよ。あんなふうになっちゃったのは…君のせいだ」

「俺は」あわてて弁解する。「盗られたお金を取り返したただけなんです。そして盗られないように気を配った…それだけなんです」

「君は何にもわかっちゃいない。鳥の翼をもちだり、魚の鱗をちぎったりしたら…どうなるかぐらいわかるだろう？」

「そんな残酷なことは…」

「したんだよ、君は」

「だって…」

「汚らわしいから、早く追い返してくださいよ！」と不意に部屋の奥から金切り声が轟く。ルリ子の母親の声だ。

「ほら」義父は俺に改めて促す。「帰ったほうがいい。しつこくしても君の心象をより悪くするだけだ。はつきりいってね、私よりも妻のほうが憤っているんだよ。愛想も尽き果てたそうだね」

「でも帰るわけにはいかないんです」俺は食いが下がる。なんせ家賃や公共料金は月末に俺の口座から引き落とされる。定期も今週中に切れる。給料日は十五日だから…それまで後二十日もある。下手をすると生活ができなくなる。改めて俺は「お願いします」と頭を下げる。

困った顔で義父は俺を見る。一度部屋の中を振り返り、また困った顔になる。そして仕方なしにという面持ちで俺にいう。

「…外で話そうか」

そして彼は俺を連れて歩き出す。家の脇には細い道路を挟んですぐ堤防がある。俺は一度振り返り向き、ルリ子がいるであろう二階の部屋の窓を見やる。カーテンは閉ざされていて中の様子はまったくわからない。

義父は堤防を越える。向こう側の階段に腰を下ろし、「まあ座りたまえ」と俺にも座るように促す。俺がそこに座ると、義父は一度深いため息を吐く。

「まあね」義父は改めて語る。「私にも少しは身に覚えがあるからね。私としては、ことを荒立てたくはないんだ。しかしね…君はあまりに酷すぎた」

「何がいけないんですか？」この人はまだ話になりそうだ、と思って俺は尋ねる。「だってそもそも盗るほうが悪いでしょ？」

「悪いだって？」首を傾げて義父は応じる。「そもそも君はルリ子がお金を盗るタイプだとわかった上で結婚を申し込んだらどう？」

「それはそうですが…いずれは彼女の…なんというか、盗癖は治していくつもりでした」

「治すか…君はまるで自分が正しいと思い込んでいるようだね」

「だって正しいじゃないですか？」と今度は俺が首を傾げる。

「違うな。君はどうも自分以外の文化を尊重することができていないようだね」

「俺が…ですか？」俺は驚きながらも主張する。「俺はできてるつもりですが？」

「そりゃみんなできてるつもりなんだよ」

「いや、それはわかりますけど…ちゃんと俺は価値観の違いなんかは尊重してます。でもいくらなんでもおかしいということはあるでしょう？」

「それが違うんだよ」義父は力説する。「価値観の違いを尊重するっていうのはね、『いろんな価値観があるとはいえ、これはいくらなんでもおかしいだろう』ということでも否定しないということなんだ。だってね、価値観が違うと『それは絶対におかしい』ってね、見えてしまう可能性はあるんだよ、どんなことでも。だからそう見えるってだけのことで否定するのはよくないってことだよ」

俺は…自分以外の価値観を認めない人間を嫌ってきたが…俺もその一人だということのか？

「そんなこといったって…」自分自身から目を逸らすように俺はすぐに反論する。「お金を盗られたら生活に支障をきたします。場合によっては生きることもできなくなるんです」

「ならどうにか生き抜きたまえ」

「いや、どうにかっていわれても…俺にはそんなに経済力はなくて…そんな余裕ないんです」

「そうなんだ」腕組みをして義父は告げる。「はつきりいってね。私は最初君との結婚に反対だったんだ」

「はあ…」あまり娘のことに関心なさそうに見えていたが…反対だったのか。しかし何をいまさら？

「何より君の経済力が心配でね。でもルリ子が必死に頼むし、私もルリ子がついていけば大丈夫かと思って最終的に折れたんだよ」

「ルリ子がついていけば？」

「そうだな」義父は何かを頭の中にシミュレーションしているように中空を見上げる。「かつてね、地球上の人類はみな狩猟採集で食料を調達していたんだ」

何の話だ？とうろたえるが…とりあえず俺は話が進むのを待つ。義父が続ける。

「しかしやがて植物を栽培したり動物を家畜化したりしてね、食料を生産するようになる。それにより余剰食料が生じ、食料生産以外のことを専門職とする者を養うことが可能になった。そして技術者や政治家が登場するわけだ。その結果政治的にも技術的にも発達が可能になったんだ。軍事的にもね。やがて狩猟採集民は、軍事的にも発達した食料生産民に滅ぼされていった。ま、これはかなり大まかな話だがね」

何が言いたいんだ？ と俺はただ首を捻る。そんな俺を横目に義父は語る。

「日がな一日働いても、その日の食料を確保するだけで精一杯…そういった者はやがて滅びる宿命にある。君という種はルリ子と出会う前のままなら…いずれ滅びる宿命だった」

なんとなくは…義父の言わんとすることはわかるのだが…いまいちピンと来ない。

「それにね」義父は大学で講義をしているように、俺の反応をあまり気にせず続ける。「人類の発達には他文化との交流が大きく影響する。交流が盛んな地域では新しいものを取り入れたり、伝えたり、融合したりして変化が活発なんだ。そして複数の社会が近隣にある場合と比べて孤立した社会は発達が遅れるものだ。だから地形が重要となる。孤島であったり、多社会との間を山脈に遮られていたりしたらね、交流に支障が生じて、どうしたって発達は遅れる。君にも身に覚えがあるだろうが」

「はい？」

「ルリ子から聞いているよ。君もプライドの山脈に遮られて、同窓会にも行けなかった。旧友に仕事の教を請うこともできなかった。そうだろう？」

「…はい」と俺はただ頷くが、心の内を言い当てられることが苦しくなって思わず俺は口走る。

「だったら何なんですか？」

「ルリ子が君を救ったということだ」

「そりゃルリ子は俺の生活を変えるきっかけにはなりました。でもだからって何をしてもいいってわけじゃないでしょう？」

「動物を家畜化することによってね、人間は日々の食料を得るのが楽になったんだが、同時に人間はその家畜から病原菌も受け取ってしまったんだ」義父は俺の問いかけを無視して講義の続きに入ったようだ。「病原菌というのは人類史に決定的な影響を与えていてね。例えばいわゆる大航海時代の話だが、ヨーロッパから持ち込まれた病原菌によって南北アメリカ大陸の人口の九十五パーセントが死んでしまったんだ。そのことがヨーロッパ人の南北アメリカ大陸の征服を随分と容易にした。もちろんヨーロッパ人の直接の殺戮も相当あったんだが、病原菌による死者の数は桁違いだ」

「はあ…」何の話をしてるんだ、と俺は訝しながらも、ただその話に耳を傾ける。義父は淡々と続ける。

「何故ヨーロッパ側が持ち込んだ病原菌がそこまで強力だったかわかるかな？」

わかるわけねえだろう、と思いながら「わかりません」と俺は答える。

「ユーラシア大陸には古くから家畜化可能な動物が多くいてね。羊や豚などは一万年ほど前に家畜化されている。そしてやがてその家畜から人間へ病原菌が感染した。その病原菌によって多くの人間が死んだろうがね、そのうちに人間の体も免疫を持つようになる。しかしそうすると今度は人間の免疫で防げないような病原菌が現れる。病原菌も生き残ろうとするからね。すると人間はより強力な免疫システムを獲得し、またそれに合わせて病原菌も強くなりといった具合にね、いわば人間は自らと病原菌を鍛えてきたんだよ。そしてユーラシア人が免疫を獲得した病原菌でアメリカの先住民の多くは滅んだ。……何が言いたいかわかるかな？」

「まったくわかりません」と俺は首を振る。

「まあいい」とそれも想定内といった具合に義父は頷く。「わからなくてもいいんだ。人類も別に病原菌を鍛えようとして鍛えていたわけではないだろうしね。それに私も実の娘を病原菌に例えるのはいささか心地悪い。まあ、とにかくわかりやすくいうと、物事はメヴィウスの輪のようなものでね、表がそのまま裏で裏がそのまま表なんだよ」

またわかりにくくなった、と思いながら俺は首を傾げる。

「例えばだな」見かねた様子で義父がいう。「私は禿げている。これはわかるね？」

「はい」

「よし、いいぞ。それで私は若いころ…君ぐらいのころにはもうだいぶ生え際が後退していたんだ。髪が徐々に領土を失っていく様はなんとも悲しかった。でも私は育毛や発毛に励むことなく禿げるに任せていた。何故か？ 私が男前だったからだ。……わからないだろう？」

「ええ」

「禿げる前の私はたいそう男前でね、あまりに男前だといくらモテても女性と交際することができないんだ。女性のほうが緊張してしまうようでね、私と向き合うと息が苦しくなるらしい。それじゃ身がもたないからね、敬遠されるんだ。だから禿げてちょうど良かったんだ。実際私がずいぶんと禿げてから女性が近づいてくるようになった。恋愛対象として見てくれなくなった女性が殆どだが、それも好都合だった。自ずと焦点が絞れていって、誰を選べばいいかわかりやすくなってね。だって私が禿げても私のことを好んでくれる人を選べばいいわけだから。そして私は最後まで残った一人を選んだ。それが今の私の妻だ。つまり大事なのはすぐに絶望せずに粘り強くあることだ。裏だと思ってもね、粘り強くたぐっていくと表になってたりするんだ。だから簡単に切ってしまうんじゃないでね。りんごをくるくる回して皮をむくときのように、切れないように気をつけて、健気に皮をむき続けるんだ。わかるかな？」

「いまいち…」

「君がさっきからいまいちわかってないのもね、粘れてないからだよ」義父も俺の理解のなさに苛立ったのか語気を強める。「なんせね、君はルリ子と結婚してまだ二年ぐらいだろ？ 物事というのはもっと長い目で見ないといかん。時間が掛かるんだ。これはわかるな？」

「わかります」

「よし、じゃあ今日のところは…帰れ」

「え？」

「だから私はともかくとして問題は妻なんだよ。ルリ子が実家に戻って来てからずっと不機嫌でときどきヒステリックに喚いている。さっき君が現れてからまた一段と煩くなった」

「すみません」と俺はただ謝る。

「思えばね」俺への苛立ちがかつての怒りを呼び覚ましたのか、義父は語気を強めて続ける。「君はまだマシなんだよ。私の妻は若いころ一千万円も奪ったうえ、海外に逃亡したんだ。シャレにも何にもならなかった。妻の免許の更新のときに教習所でどうにか捕まえたけどね。大変だった。それに比べてルリ子はそこまで遠くまで逃げようとしな。そもそもルリ子には半分私の血も流れているからね。まあ…全然マシなんだよ。そうそう、もし君がルリ子とやり直せるようなら、さっさと子供をつくったほうがいい。それで状況は少し変わる」

「子供をつくればお金を盗らなくなるんですか？」

「いや、子供をつくると逃げるのが難しくなるんだ。子供ができてからも一度妻は子供も連れて海外へ逃亡しようとしたが、子供の分のパスポートの申請に手間取っている間にどうにか捕まえることができたんだ」

「はあ…」がつくりと俺は肩を落とす。

「ま、なんだ…」義父が続ける。いちおう君が来たことは伝えておくから、今日のところは帰ってくれ。とりあえず私は少し静かに休みたい。いってなかったが寝不足でね。騒がせないでくれよ、頼むから。じゃ」

義父は腰を抱えながら立ち上がり、疲れた様子でゆっくりと帰っていった。俺は呆然と立ち尽くしそれを見送った。

帰るか……いや、帰ってしまえば次の休みは日曜日。それまで恐らくここに来る暇はない。それまで生活できるか？ いや、それよりもルリ子がそれまでにどこかに逃げる可能性がある。それこそ海外にでも逃げられたら…終わりだ。早いほうがいい。しかし義母を怒らせて義父を疲れさせるのも忍びない……

一度ルリ子の携帯に電話を掛けてみる。……当然のごとく出ない。

俺は堤防から、ルリ子の部屋の窓を見据える。まだ離婚はしていないわけだし、俺がそこに忍び込んでも住居侵入罪にはならないだろう……そう思って俺は塀を越えて敷地に入る。雨どいを伝って庇に足を掛け、二階の部屋の窓に手を掛ける。鍵は閉まっているようで開かない。窓をコンコンとノックするが無反応。パンパンと叩いても窓は開かれない。仕方なく俺はルリ子の耳に届いてくれと祈りながら、ガラスの向こうに訴える。

「ルリ子…いるんだろ？ 俺だ。お金を取り返しにきたわけじゃないんだ。だから窓を開けてくれ。頼む。君がいないと生活できないんだ。俺は確かに乱暴だった。それは悪かったと思っている。お金は返さなくていい。とりあえず君に預けることにする。だからとにかく帰ってきてくれ」

住居侵入罪

…窓は開かれない。その部屋からは何の反応もない。その代わり物音を聞きつけたのか義母が庭から現れた。義母は俺を見るなり「何をしていますんですか?!」と叫んだ。

「すみません。どうしても話がしたくて…」俺は弁解を義母へと緩やかに投じる。

「この人でなし! 警察を呼びますよ!」と義母はライナー性の怒りを俺にぶつける。

「呼びたければ呼んでくださいよ」と俺は投げやりに伝える。だって呼べやしないだろう。これが犯罪ならルリ子だって…

「呼びますからね!」何か口惜しそうに義母はそういつて家の表のほうへ消える。

俺は引き続き、ルリ子の部屋へ声を掛ける。しかし反応がない。耳を澄ませて中の様子をうかがうが…何もわからない。そこにはいないのかもしれないとも思い、いったん下へ降りようかと考えたところで……表から警察がなだれ込む。四人もいる。まさか通報するとは……。パトカーがサイレンを鳴らさずに来たのは…世間体を考えてのことなのか、それとも俺に気付かれなためなのか…

「おい、こら降りてこい!」と警察の一人が怒鳴りつける。

「降りますよ…」と俺はひよいと飛び降りる。とたんに二人の男が俺の後ろに回りこみ、俺を固く抱きかかえる。

「署に来てもらおう」警察の一人がきっぱりとそう告げる。

「何故です?」

「住居侵入罪だ」

「俺はこの家の長女の夫ですよ」

「関係ない。この家の人の同意がなければ勝手に侵入することは許されない。そして通報してきたのはこの家の奥さんだ」

住居侵入罪になるんだな…と俺は落胆しながらも、同意を求めて義母を見る。義母は物置の影から俺を睨みつけている。…同意してくれそうにない。なんせ通報したのはあの人だ。あとはもうルリ子にすぎるしかない。ルリ子の部屋を見上げて俺は叫ぶ。

「ルリ子ー! 助けてくれ!」

俺の声はまるで壁に吸い込まれてしまったかのようで……ルリ子の部屋は無反応。

「話は聞いている」警察の一人が続ける。「離婚を突きつけられて逆上して暴れているんだろ?」

「いえ、ちょっと待ってください。そういうわけじゃ…」

「来い」警察たちは慣れた手つきで俺を速やかに連れて行き、パトカーに乗せる。俺はパトカーの窓から振り返る。ルリ子の家が徐々に遠くなっていき、角を曲がったところで視界から消えた。その間もルリ子は姿を見せなかった。

警察署内の狭い部屋に通され錆び付いたパイプ椅子に座らされる。俺を連れてきた男とは別の、二人の強面の男が俺を見下ろす。

「なあ、離婚突きつけられただけだろ? 自分にも非があったんだろ? それで暴れるなんて見

苦しいじゃねえか？ なあ！」坊主頭で色黒で目がやたら丸い男がそう脅すように告げる。

「事実をきちんと認めて謝罪してね、二度とこういうことをしないと誓えば帰れるんだ。離婚に反対ならちゃんと弁護士に相談して筋を通すべきだ。わかるだろ？」もう一人の…顔が白くて固そうで…どこか炊飯器のような男がそう続ける。

「俺は何をしたってわけでもないんです」…そういう俺の声はいつのまにか涙声になっている。

「通報されているわけだからね。尋常じゃなかったんだよ。あんたの態度は」炊飯器が応じる。

「でもあそこは嫁の実家なんですよ？」

「だからその嫁の親に通報されているわけだから、よっぽど恐ろしかったんだらうよ」

「俺は壁をよじ登って二階にいる嫁と話そうとしただけなんです」

「だから普通嫁と話すために壁をよじ登らないんだよ」

「でもそうするしかなくて…」

「壁をよじ登らないと話せないなんてとっくに終わっているんだらう？ あんたの往生際が悪いんだらうが」

「だって…」

「こっちは逃げ口上は聞き飽きてるんだ！」坊主頭の男が不意に割って入る。「さっさと罪を認めて謝っちまえよ！」

なんだってこんなふうには俺は責められているんだ？ どうして日曜日の夜を俺はこんなふうには過ごしているんだ？

「あなたたちは何も知らない…」俺はそう声を振り絞る。

「そりゃね」炊飯器が応じる。「こっちは家庭内で何があったか知らん。でもね、家族だからって何をしてもいいってわけじゃないんだ」

「そうですよね！」と思わず俺は強く同意する。坊主頭と炊飯器がきよとんとしている。俺は続ける。

「そもそも俺の嫁が……あんなことをしなければ……何かといえればあれだから…」俺自身も嫁をかばっているのかどうか分からないが、つい言葉を濁す。

「何いってんだ、こいつ？」坊主頭がいう。

「よくわからんが、面倒くさいやつだな」と炊飯器が坊主頭に囁く。それから改めて俺にいう。

「なんにしてもね、あんた男じゃないね。嫁に何されたか知らんが、女のすることということなんかにはいちいち激してちゃいかんよ。情けない話だ。ちょっとぐらいの理不尽でも耐えるのが男ってもんだらう？」

だからなんで俺が男らしくないみたいになってんだ？俺が悪いのか？俺が謝って許してもらうのか？おかしいよな？しかしこの世に俺の味方はいないのか？

「とにかくこのままじゃあんた帰れないよ」炊飯器がいう。

「言っておくが」坊主頭が俺を睨みながら告げる。「牢に入るってのはな、結構大変なんだぞ。寒いしね。最初は実際の寒さよりもっと寒く感じるらしい。それに個室じゃないからな。他にややこしいやつがいっぱいいる。おまえみたいな真面目そうな奴はおかしくなっちゃうんじゃないか。なあ、おい、どうする？」

はったりなのだろうが…いやなものだな、この脅迫も。

認めればいいのか？ 離婚を突きつけられて我を忘れて強引な手段に出てしまったと。誓えばいいのか？ 二度とそんなことはしないと。いいのか、それで？ 貯金を百万円もぶん取られて。俺が謝って帰って…それでいいのか？

俺は思わず俯く。涙が零れそうになる。何が悔しいって何が悲しいって…ルリ子と出会って一緒に暮らして幸せだった時期も確かにあって……それがこんなふうになってしまうのがあまりにも辛い……

「だんまりは困るなあ」炊飯器が頭を搔く。「こっちだってね、家族のことは家族で解決してくれって思うんだよ。でもね、動かないとね、万一のことがあったときに“あのとき警察が動いていれば命は救われたのに”とかいわれたりするんだよ。頼むからさ、大したことじゃないだろう？ 謝るんだ。それでいいんだ。深く考えなくていい。な？ わかるだろ？ あんたもいい年なんだから」

俺は何もいわない。

「いい加減にしろ！」坊主頭が痺れを切らしたのか怒鳴りつける。「おまえみたいなものが何強情張ってんだ！ おまえなんかが意地張って何になるんだ！ クズやろうが！ そんなに自分が大事か？ おまえなんかとっくに見放されているんだぞ？ なあ？ 無様なだけだろ、意地張ったって。なあ、おい！ 聞いているのか！？」

俺は何もいわない。

ダメだなこれは、といった表情で、炊飯器が坊主頭の肩を叩く。そして「ちょっと任せる」と呟いて炊飯器は部屋を出る。俺は…黙り続ける。

「馬鹿だな、おまえ」と坊主頭が呟く。「誰も得しねえのに」

「損得の問題じゃない…」と俺は下を向いてつぶやく。

「何か言ったか？」

俺はまた黙る。…損得の問題じゃない…自分の言葉が耳に残る。損得の問題じゃない……メヴィウスの輪…損はそのまま得になり、得はそのまま損になる……ならその繰り返しの先にいったい何があるんだろう？ それを見てみたいな、とふと思う。

やがて炊飯器が戻ってくる。そして俺に告げる。

「あんた帰っていいよ」

「え？」俺は口を開けたまま顔を上げる。

「あんたの嫁さんが謝りに来たそうだ。自分が悪かったってね」

「悪かった？」俺は驚く。「“悪かった”っていったんですか？」

「そうだよ。だからもういいよ。帰りな。まったく最初から自分たちで解決できただろうに。まったく迷惑だよ」ぶつぶつ愚痴りながらも炊飯器は戸を開けてくれた。「ほら、好きにしな」

署の外に出ると、その駐車場でルリ子が俺を見つめている。俺はルリ子に歩み寄り、思わず「ありがとう」と口走る。ルリ子は俺を抱きしめる。そして涙の滲んだ声で彼女は「ごめんね」とつぶやく。

「いいよ」と俺は彼女の耳元で答える。「わかってくれたんならもういい」

「本当にごめん」

「帰ってきてくれるか？」

「うん…」 そう頷いてから彼女は俺を胸元から見上げて恥ずかしそうに笑う。

彼女の笑顔を本当に久しぶりに見て、俺は一瞬で満たされる。彼女が照れながら続ける。

「あなたは私がいないとダメみたいなもの」

「そうだな」と呟く。なんせ彼女が戻ってこないと生活費もままならない。

「あのさ」 彼女は見越したかのようにいう。「お金は返さなくていいって言ってたわよね？」

「……聞こえてたのか？」 窓越しの訴えは届いていたようだ。

「うん」

「まあ…いいよ。俺がそういったもんな。返さなくていい。これから君がお金を盗らないなら、まあ構わないよ」

「何いってんのよ？」 俺が冗談でもいったかのように、彼女は笑って応じる。「お金は盗るわよ」

「……盗るの？」

「盗るわよ」

「だって、さっき“ごめん”って謝っただろ？ “自分が悪かった”って言ったんだろ？」

「それは警察に連行までさせてしまって悪かったと思ったの。実家に勝手に忍び込んだのはどうかと思うけど…捕まえちゃうのは可愛そうだったの。私、二階の窓からただ見ててさ、すぐに止めればよかったのに…。だから本当に悪かったと思ったの。でもお金を盗るのはまた別の話よ。これからだってお金は盗るわ」

「盗るのか…」

「何よ？」

「いいよ、今日はとにかく帰ろう」 そういって俺は彼女の手を取り歩き出す。

「うん！」 彼女は無邪気な子供のように手をつなぐことを喜ぶ。

仕方がない。義父にいわれたとおり、長い目で見よう。とりあえず収入をもっと増やしたほうが良さそうだ。仕事で今まではいわれたことをこなすだけだったが…自分で新作ゲームの企画を立ててみよう。それが採用されればポジションも変わって収入も増えるだろうし、さらにそれが売ればもっともっと……そりゃそんなに上手くはいかないだろうが、でももう少しがんばってみよう。それから子供もつくろう。彼女が逃げにくくなるように。そしていつか…彼女を治そう。五年、十年と掛かるかもしれないが、俺はいつか必ず彼女を治してみせる！

結果オーライ

～三十二歳～ 俺の重大ニュース

○ルリ子が百万円を盗って逃げる

○俺が採用試験で提出したゲームを原案として新作ソフトの制作が決まる。ゲームタイトル『ラブアップ』

～三十三歳～

○『ラブアップ』発売

○ 長女誕生。名はルミネ。

～三十四歳～

○年収が三〇〇万円を超える。

○ルリ子が一二〇万円を盗る。

～三十五歳～

○ 俺が新しくゲームを企画。 ゲームタイトルは『ウルトラランドスケープ』

○ 次女誕生。名はリコ。

～三十六歳～

○『ウルトラランドスケープ』発売

○年収が四〇〇万円を越える。

～三十七歳～

○『ウルトラランドスケープ』販売本数一〇万本とそこそこのヒット。バージョンアップしたV O L . 2 の制作決定

○ ルリ子が二〇〇万円を盗る。

～三十八歳～

○ 年収が五〇〇万円を越える。

○ ルミネが五〇〇円を盗る。

～三十九歳～

○ 『ウルトラランドスケープII』発売

○ ルリ子が二二〇万円を盗る。

～四〇歳～

○ 『ウルトラランドスケープII』販売本数二〇万本。『ウルトラランドスケープ』、『ウルトラランドスケープII』ともに欧米での販売も決定。

○ 一戸建てマイホームを購入。

～四十一歳～

- ウルトランドスケープ I、II 合わせて世界で二〇〇万本売れる。
- ルリ子が五〇〇万円盗る。

～四十二歳～

- ウルトランドスケープ III 世界同時発売
- ルミネが千円盗る

～四十三歳～

～四十四歳～

～四十五歳～

～四十六歳～

.....

.....

.....

.....

.....

.....

...

.

.

そして俺がルリ子と結婚してから七十年が経った。俺はここ数日病院のベッドで天井を見上げるだけの生活を送っている。そろそろだろうな、と感づきながら…意外と恐怖を感じない。一人ではもう起き上がることもできないが、テレビを見れるように首を動かすことはできる。

世話はルリ子とルミネが交代でしてくれている。今もルリ子は病室の棚に置いた俺の財布からお金をくすねている。しかしもはや盗られることはなんでもない。そのお金は、俺の口座に振り込まれた年金をルリ子が下ろしてきてくれて、小遣いとして俺に渡したお金だ。そして今やすべ

ての買い物は彼女がしてくれている。何の問題もない。……それにあのカネはいったい誰のものなのだろう？

誰のものでもないんじゃないかとすら思える。土地や水が元々誰のものでもなかったように、空気が今のところ誰のものでもないように。

テレビのニュースでは領土問題が取り上げられている。何十年も前からしばしば揉めていたとある島の件だが……土地が元々誰のものでもなくて、人間が利己的な生き物である以上、こうした問題はなくなるのだから。そうした問題は土地に限らず、別の形でもそこかしこに溢れていて…だから生きてる限り人は理不尽に見舞われ続けて。その理不尽に対しては逃亡も攻撃も許されていなくて、でも人はどうにかしようとして落とすところを見つけて。そして少しずつ…少なくとも表面的にはマシになってきているようだ。かつては領有権を主張するあまり大国の船が隣国の船を砲撃するようなこともあったが、さすがに最近はそんな荒くれた行動は見られない。時間を掛けて少しずつ変わったのだから。

例えば…ルミネやリコも旦那からカネを盗っているようだが、その額はせいぜい十万円だそう。そしてルミネの娘の裕子は旦那から一万円程度しか盗らないらしいし、その裕子の娘はまだ十代とはいえ、彼氏から小銭しか盗らないらしい。…例えばかつて義父がいった“長い目で見る”というのは俺が思うよりもっと長い目であったようだ。五年、十年ではなく、五十年、百年か、五百年、千年か、あるいはもっともっと……

「ねえ」とルリ子が千円札を見ながら、嬉しそうに話し掛けてくる。「このお札ね、昔私があなたから盗ったのと同じお札よ！」

「…どうしてそんなことがわかるんだ？」

「だって本人がそういっているわ！」

「…本人？」

「ええ、千円札がそういっているわ。“久しぶり、ぼくのこと覚えている？”ってきいてきたの。そして“随分前にも君は他人の財布からぼくを抜き取ったね。たしかイチョウの木の下で”って。そんなこというのよ！」

「…そうか」呆けてしまったのか…特殊な感覚を獲得したのか…ルリ子は最近ときどきこんなことをいう。そんなルリ子を俺はかわいいな、と思う。顔はもうしわしわなのに、少女のように心を光らせている。その光を浴びているとき、俺は幸せだ。

「…ルリ子」と俺は呼びかける。

「何？」

「…ありがとう」

「どうしたのよ？」

「…君がいなければ俺は子供の愛らしさとか家族を築くことの素晴らしさを知らずに生きてだろうなって思うんだ。いや…生きてないな。もっと若いころに一人でとっくに死んでたと思う。だから…俺の命を救ってくれて…俺を幸せにしてくれてありがとう」

ルリ子は頬を赤くして嬉しそうに笑う。恥ずかしくなったのか目を逸らし窓の外に目を向ける。俺は続ける。

「…俺はきっと若いころは小さなカマクラの中で…一人で身を縮めて暮らしてたんだ。正しさと

いうカマクラの中で。そのカマクラは俺を守ってくれていた。暖めてもくれていた。でもそれは同時に俺を閉じ込めてもいた。そこでそのまま春が来るまで耐え忍ぶって手もあったが…それが極地の近くなら永久に春なんか来ない。俺は実際極地付近にいた気がする。永久凍土が大地を覆っているようなね。そんなところで俺はカマクラの中に引き籠もっていた。そこに君が現れた。君は俺のカマクラを大きなハンマーで叩き壊した。俺はいきなりの寒風に襲われて、もちろん君に怒った。そして君を追いかけて追いかけて、気が付くと暖かい春の日が差す、緑あふれる大地にたどり着いてたんだ。だから…すべてはただの結果オーライだ。でも俺にとっては最高の…極上の結果オーライだったよ」

ルリ子はこちらを振り向いて、おもむろにいう。

「なんて？」

「あの…」俺には語り直す体力が残ってない。仕方なく一言だけ改めて伝える。「楽しかったよ」

「私も」そう言ってルリ子はにっこりと笑う。本当は何もかも聞こえてたんじゃないかとも思える悪戯っ子のような笑顔で。

時々こうも思う。結果オーライとはいったが、もしかしたらすべて彼女は意図していたことなんじゃないかと。そして俺は尋ねる。

「君が俺のカネを盗り続けたのは、本当は俺をがんばらせるためだったんじゃないか？ 同時に…俺に理不尽に慣れさせるためだったんじゃないか？」

これは今までにも何度か尋ねていた。しかし彼女はいつもその問いにちゃんと答えなかった。彼女はいつも否定も肯定もせずはぐらかす。俺は最期にもう一度だけと思って聞いたのだが、やはり今回も彼女はちゃんと答えない。「何言ってるのよ、今さら」といって笑うだけ。否定も肯定もないが…まあ、本当に「今さら」だ。この際どっちでもいい。ただ俺は…彼女の笑顔を見つめて満たされる。そして改めて思う。…この笑顔だ。この笑顔を見ていたくて俺はずっとがんばってきたんだ。息も絶え絶えで足もヨロヨロで。それでもずっと走り続けてきたんだ。彼女には何百万も何千万も持っていかれたが……今ここにある幸せと比べれば、それもやっぱり「はしたカネ」だ。……もう全部くれてやればいい。

「…ルリ子」と俺は再び呼びかける。すでに遺書にもしたためてある内容を俺は改めて告げる。「俺の遺産だけどさ、全部君に上げるよ。ルミネやリコにも分けてやりたいが…そこらへんの配分は君に任せる。だからとりあえず全部君に預けるよ」

「ありがとう」と今まで見た中でも最高の笑顔でルリ子は熱く微笑む。そして両方の目尻から涙を流す。その涙は、俺の最期を悲しむ涙なのか、それとも俺の遺産をもらったことの嬉し涙なのか……見極められないまま俺は目を閉じる。

『ウルトラランドスケープ』ゲーム概要（ファミリーステーション用ゲームソフト『ウルトラランドスケープ』説明書より抄録）

人類は地域によって異なる発展を遂げたが、そこに大きく影響したのが大陸の広がり方や地形だ。もしユーラシア大陸が真ん中でズバッと裂けて、大きく離れた二つの陸塊になっていたら、もしアメリカ大陸がオーストラリア大陸とつながっていたら、もしアフリカ大陸の砂漠が牧草地帯で南アメリカ大陸の山脈が平地だったら、人類史は現在とはまるで異なるものになっていただろう。

このゲームはそうした「もし」を実現する、人類史シミュレーションだ。プレイヤーは神になって地球の歴史に「干渉」し、地形や生態系を変化させて、思い思いの地球をつくることができる。もしかしたら実際の歴史とは逆にインディオがヨーロッパを支配したり、アジア人がヨーロッパ人より先にアメリカ大陸を発見したり、アボリジニーが全世界を植民地としたりとまったく新しい人類史が描かれるかもしれない。わずかな「干渉」でも大きく運命を変えようこの世界を体感してみよう。

君に預けて

<http://p.booklog.jp/book/28433>

著者：山城 窓

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/verandah/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/28433>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/28433>